

荻原善太郎編

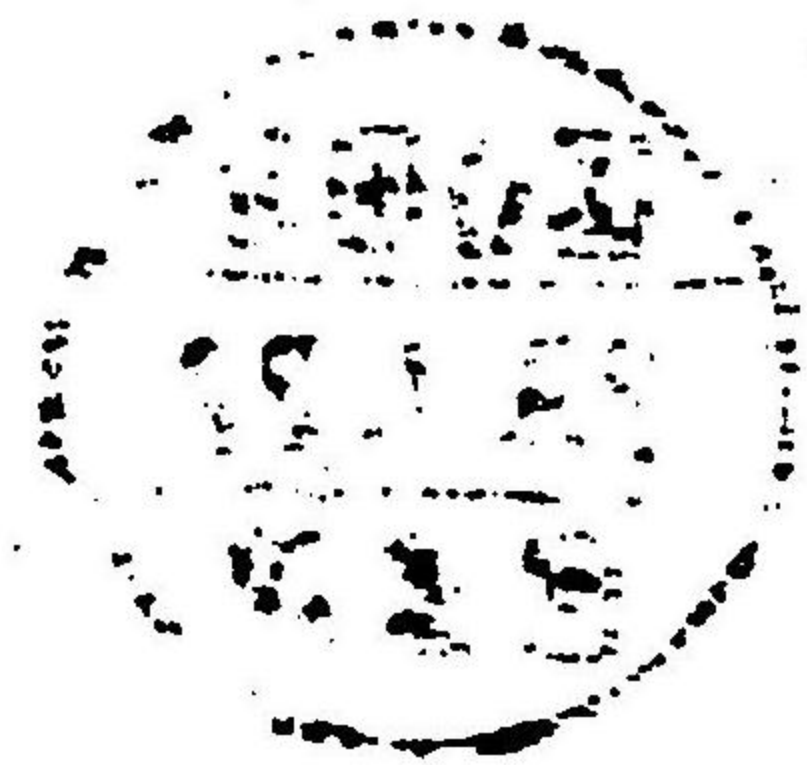
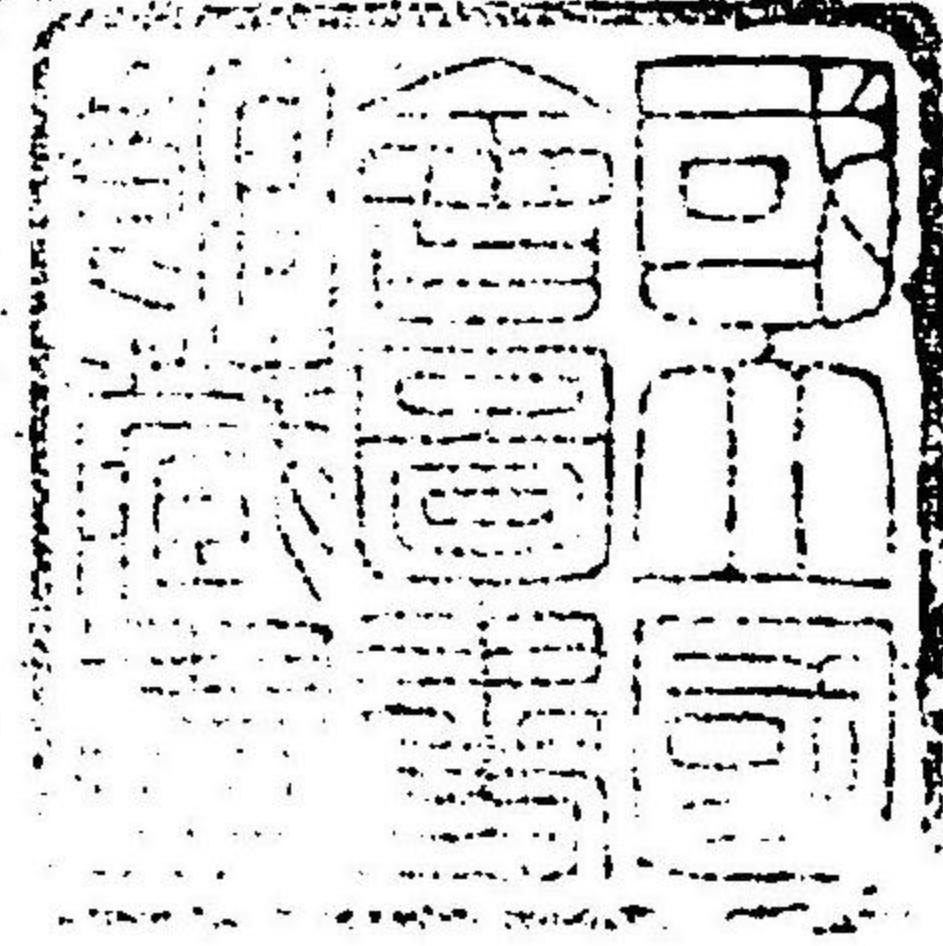
日本博士傳

發兌

吉岡書籍店

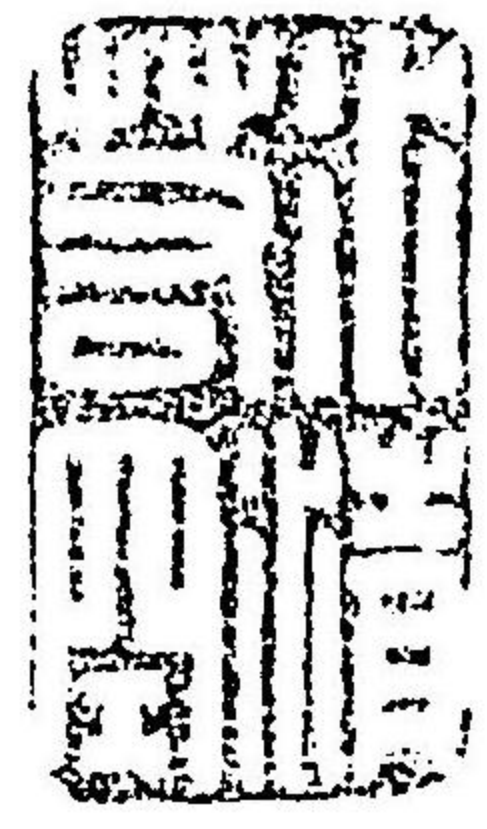


2810313n



336857

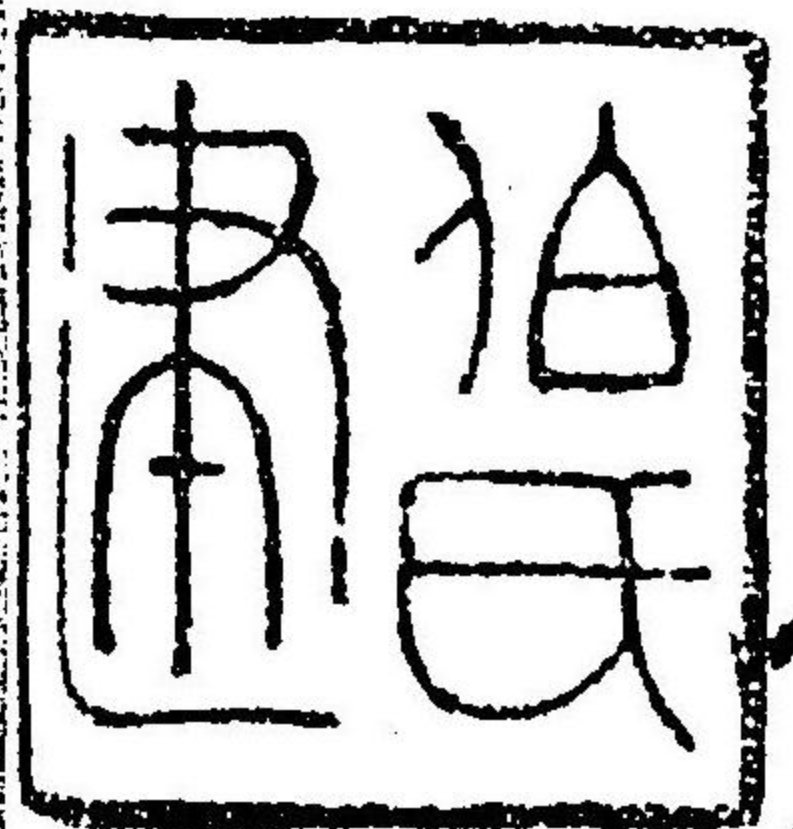
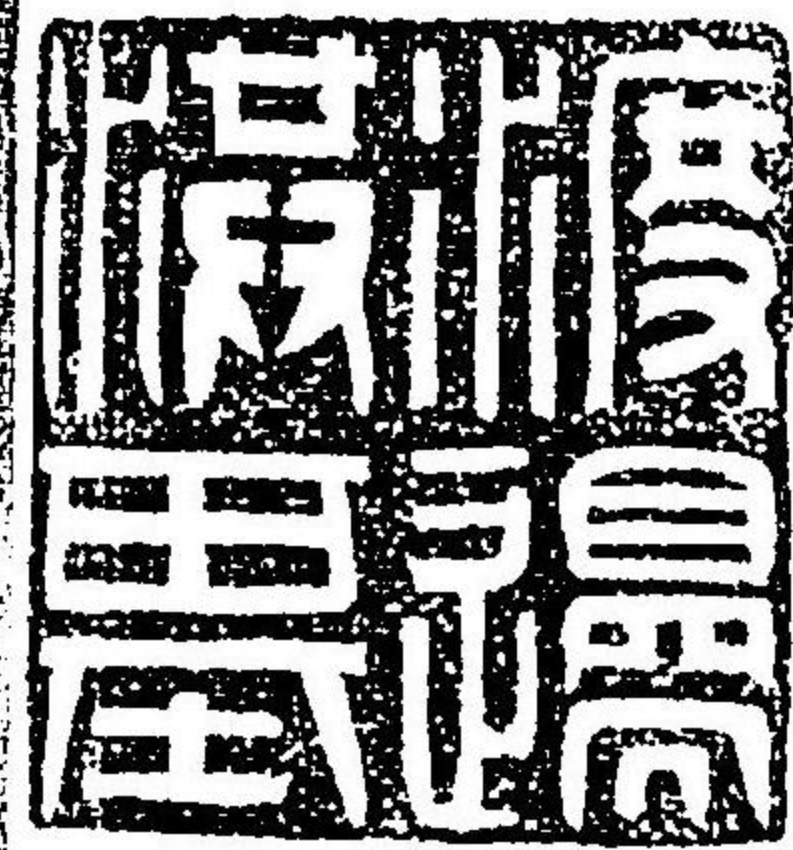
金聲



玉色

明治二十一年五月

漢學家人造基題



日本博士全傳自序

日本博士全傳序

野史氏採筆而草博士傳會傍在客卒爾問曰凡傳以記其功績之可傳於後世者而已今子作傳揭生年叙履歷其事徃々有乖戾於傳体者焉况於生傳乎恐得無苦其材料哉野史氏對曰不然夫傳不問其生傳為死傳苟一事一業之足以傳於世者乃皆無不傳也故生年傳也履歷傳也言行亦傳也總係其人之行為者悉可以為傳矣矧堂々日本博士豈其無可傳者耶頃者將發刊日本博士全傳以大使青年子弟奮起於學事焉庶

幾裨補於方今文教之萬一歟只憾身乏閑暇此
傳亦成於匆卒之間而不能盡意於搜索是最為
可耻耳明治廿有一年秋下浣識

西海福陵

自狂居士誌

凡 例

- 一 此傳ハ專ラ青年學事獎勵ノ爲メ著述シタルモノナレバ
勉テ虚ヲ去リ實ヲ記スルニ止マリ毫モ文飾ヲ爲サズ
- 一 掲載ノ博士ハ順序ヲ撰ハズ便宜文、法、理、醫、工ノ序ヲ以テ
之ヲ列ス
- 一 此博士傳ハ專ラ青年學事獎勵ノ爲ニ著述シタルモノナ
ルヲ以テ傳体ハ必ズシモ古例ニ據ラズ
- 一 博士ノ生年、月日、郷里、學業、履歷等ヲ詳叙シテ學生ノ參考
ニ供ス
- 一 甲ニ詳或ハ乙ニ畧又ハ彼ニ出ダシテ此ニ掲ゲザルハ別
ニ意アルニ非ズ讀者之ヲ參照セハ則チ可ナリ

日本博士全傳目錄

- 文學博士加藤弘之君小傳
- 法學博士箕作麟祥君小傳
- 理學博士伊藤圭介君小傳
- 醫學博士高木兼寬君小傳
- 工學博士長谷川芳之助君小傳
- 文學博士重野安繹君小傳
- 法學博士鳩山和夫君小傳
- 理學博士山川健次郎君小傳
- 醫學博士大澤謙二君小傳
- 工學博士原口要君小傳
- 文學博士島田重禮君小傳
- 法學博士穗積陳重君小傳

錄目傳全士博本日

二

- 理學博士菊池大麓君小傳 四一
- 醫學博士三宅秀君小傳 四四
- 工學博士松本莊一郎君小傳 四七
- 文學博士小中村清矩君小傳 五〇
- 法學博士田尻稻次郎君小傳 五三
- 理學博士矢田部良吉君小傳 五五
- 醫學博士池田謙齋君小傳 五九
- 工學博士古市公威君小傳 六一
- 文學博士外山正一君小傳 六五
- 法學博士菊池武夫君小傳 六七
- 理學博士長井長義君小傳 七二
- 醫學博士橋本綱常君小傳 七四
- 工學博士志田林三郎君小傳 七七

錄目傳全士博本日

三

- 文學博士末松謙澄君小傳 八一
- 法學博士岡村輝彦君小傳 八五
- 理學博士寺尾壽君小傳 八九
- 醫學博士佐藤進君小傳 九一
- 工學博士辰野金吾君小傳 九七
- 文學博士中村正直君小傳 九九
- 法學博士木下廣次君小傳 一〇三
- 理學博士松井直吉君小傳 一〇五
- 醫學博士田口和美君小傳 一〇七
- 工學博士谷口直貞君小傳 一一三
- 文學博士川田剛君小傳 一一五
- 法學博士富井政章君小傳 一一九
- 理學博士櫻井鏡二君小傳 一二一

- 醫學博士小金井良精君小傳 一三四
- 工學博士岩谷立太郎君小傳 一二六
- 文學博士黒川眞頼君小傳 一二八
- 法學博士井上正一君小傳 一三一
- 理學博士小藤文次郎君小傳 一三四
- 醫學博士佐々木政吉君小傳 一三六
- 工學博士高松豊吉君小傳 一三八
- 文學博士南條文雄君小傳 一四〇
- 法學博士熊野敏三君小傳 一四三
- 理學博士箕作佳吉君小傳 一四五
- 醫學博士緒方正規君小傳 一四八
- 工學博士平井晴二郎君小傳 一五〇
- 通計五十名

日本博士全傳

福岡 萩原善太郎 著

文學博士加藤弘之君小傳

君の八世の祖久之但馬出石藩主仙石侯に仕へてより累代家祿二百二十石を食み父の四郎兵衛正照に至て用人役を勤めり君嘉永五年父に従つて始めて江戸に來り佐久間象山の門に入りて兵學を講じ後ち大本忠益に就きて蘭學を學び後又獨佛英學を修む

君初めの名は弘藏後ち弘之と改む天保七年六月廿三日を以て但馬國出石に生る幼より穎敏一を聞て十を知る長ずるに及んで益々名聲あり萬延元年幕府に聘せられて開成所雇教員とあり元治元年更に同所教官とある明治元年目付役より大目付役に累遷し又勘定奉行を兼ね此の時に當り洋學者を以て君と並び稱せらるゝ者は神田孝平、箕作秋

坪中村敬介等にして當時之を四傑と稱せり

明治元年十月政体律令取調御用掛仰付らる同二年一月會計官權判事
仰付らる四月制度寮准撰修仰付らる五月學校權判事に任せらる七月
大學大丞に任せられ九月從五位に叙せらる同三年十一月國法會議出
席を命せらる十二月侍讀仰付らる同四年七月文部大丞に任せられて
中教授に兼任を八月大外史に任せられ十月外務大丞に任せらる同五
年八月宮内省四等出仕に補せらる同七年二月一等議官に兼任を同八
年一月三等侍講に任せられ四月議官に任せらる同十年二月東京開成
學校總理の任を囑せられ一ヶ月金二百圓を給與せらる四月東京大學
法、理、文三學部總理の任を囑せらる九月一ヶ月金二百五十圓を給與せ
らる同十二年一月東京學士會員に撰擧せらる同十三年四月文部省三
等出仕に補せらる六月正五位に叙せらる同十四年七月東京大學總理
に任せられ年俸金四千二百圓下賜せらる同十五年十二月勳三等に叙

せられ旭日中綬章を賜ふ同十七年十月年俸金四千八百圓下賜せられ
十一月從四位に叙せらる同十九年一月元老院議官に任せられ尋で從
三位に叙せらる同廿一年五月文學博士の學位を授けられ四月勳二等
に叙せられ旭日大綬章を賜ふ又是れより先き東京府に轉籍と

其著はそ所の書は隣草、交易問答、西洋各國盛衰強弱一覽表、政体畧、眞政
大意、國体新論、國法汎論、立憲政体起立史等ありて大に世に行はる
始め君の宮内出仕に補せられて侍講の任にあるや或る人俄かに民撰
議院を撰定をへきとを建議せり是に於てか論者二派に分れて甲は以
て之を可とし乙は以て之を不可とし朝野騷然たり君乃ち尙早論を唱
へて之を辨駁せしかば忽ち輿論二途に分れて遂に漸急の雨旗を見る
に至れり

野史氏曰嗚呼君は天資絶倫の才を以て博く和、漢、英、獨、佛、蘭の六學に通
して修めざるものなし宜なり曩きに陛下の侍講に擧けられ又久しく

東京大學總理の職に居れり其學生を陶冶する秩序蕭然として亂れそ
 後ち議官に轉任せらるゝに當り宛も赤子の父母に於けるか如く滿校
 擧て之を惜めりと亦以て其の愷悌の君子たるを知るべきなり
 伊藤 法學博士 筈作麟祥君小傳

維新以來著るしく其進歩を來たせしものは法律にして曩きに新律綱
 領の一たび世に出でゝより法律の進歩も着々歩を進めて遂に明治十
 三年に現行刑法治罪法の發布を見るに至れり當時重に其編纂の業を
 取れるものは實に君等與つて力あり

君通稱は貞太郎後ちに貞一郎と改む舊作州津山藩士にして後ち東京
 府に轉貫と弘化三年六月廿九日を以て江戸に生る父を省吾と謂ふ夙
 に蘭學を修めて坤輿圖識等の著あり此の時に當て攘夷鎖港論囂々ど
 して海内に滿ち未だ泰西の美を語るもの絶てなかりしに此書一たび

世に出でゝより世人始めて目を歐米の各國に注ぐに至れり

君天資聰明穎智幼にして父を失ひ祖父筈作阮甫の鞠育する所たり阮
 甫の名醫なり嘗て幕府の召に應じて開成所教授となり大に盡そ所あ
 り八絃通誌等の著あり君亦少ふして安積良齋翁の門に入りて漢籍を
 修め又其父祖の業を繼いで蘭學を修め後ち更に英佛二學を修む慶應
 二年徳川民部大輔に從つて佛國に赴き大に感發する所あり居ると凡
 そ二年にして歸る明治元年一等譯官に擧げられ續いて大學中博士に
 任せらる君乃ち一大私塾を開いて大に英佛二學を教授し吟誦の聲常
 に門に滿てり

明治二年從六位に叙せらる同三年八月制度御用掛兼勤仰付らる同四
 年四月大學大博士に任じ正六位に叙せらる十月司法權中判事に兼任
 す十二月從五位に叙せらる同五年八月大外史に任せらる同六年五月
 翻譯局長仰付らる同八年九月司法省四等出仕に輔せらる同九年一月

司法大丞に任せらる同十年一月司法大書記官に任じ翻譯課民法編纂課兩長仰付らる同十三年三月太政官大書記官に任せられ又東京學士會員に撰舉せらる尋て元老院議官に任じ年俸三千圓下賜せらる四月民法編纂委員仰付らる六月從四位に叙せらる十一月年俸三千五百圓下賜せらる同十五年二月年俸四千圓下賜せらる六月勳三等に叙し旭日中授章を賜ふ同十七年五月會社條例編纂委員仰付らる同十八年三月破産法編纂委員仰付られ十月正四位に叙せらる同十九年三月商法編纂委員仰付らる十月從三位に叙せらる同廿年四月法律取調委員仰付らる同廿一年五月法學博士の學位を授けらる十一月司法次官に榮轉す

君人と爲り温厚篤實にして能く人を容る平素尤も職務に勉勵し其退朝平居のときと雖も尙曾て筆を捨てしとかく彼の商法民法訴訟法等の編纂事業も他日日を追ふて之が完結を告げんとせり其功績豈に

想はざるべけむや

野史氏曰君は天資聰明の智と稀世の才と積年の經驗と多年の勤勉とによりて遂に大に前代未曾有の大業を翼賛するを得たり語に曰く霜を踏て堅氷至ると抑も亦由て來るところのものあるなり

理學博士伊藤圭介君小傳

君は錦窠又太古山樵と號し幼より慧發嬉戲常に草木の花實を翫弄するを嗜好し長るに及んで大に植物學に志し尾濃、勢三州の諸山より東海東山北陸山陰西海の山野を拔涉し苟も植物に關するものは採て究めざるものなく遂に數十年の經驗と研究とにより帝國植物學者の泰斗と仰かるゝに至れり

君は享和三年一月廿七日を以て尾張國名古屋に生る父を西山玄道と云ひ醫を以て業とせり君亦父祖の業を繼て蘭學を講せしか一朝感

る所ありて専ら植物採集に従事し十八歳の頃ハ水谷某に従ひて尾州海濱并に篠、日間賀の二島に渡り多く草木金石類を採拾し三州猿投山に至つて歸る是れを採集の第一初期となす

文政四年君歳十九始めて西京に遊ひ植物の諸名家と相往來し共に京攝諸峰に探り同十年に三遠諸山を経て江都に遊ひ後ち日光、榛名、妙義、木曾諸山を経て家に歸り日ならずして再ハ長崎に遊ひ吉雄如淵翁の家シールポルドに寓し蘭館獨逸人シールポルドと屢々相往來して植物學を研究して大に發明せるところあり氏嘗て君に謂て曰く和洋の植物を講して互に其智識を交換せざる吾れ師友の思をなすと又居ると一年九州より播州に涉り沿道の諸山を経て歸郷せり

天保三年君歳三十再び木曾諸山を探り全九年に藩主の命を以て濃州加子母山中へ在勤して苦楚を嘗め嘉永三年四月三百目加農砲を鑄造して藩侯に獻じ其賞として金若干を賜ふ全五年大垣の老友飯沼慾齋

翁并に門生菅百社友等を伴ひ江州伊吹山に探採して新種を發見し安政三年更に京江、攝勢志、諸州の山野に索め全五年名古屋朝日街に一大藥園を開設して旭園と號し尋て街内に博覽會を開筵したり時に遊覽を請ふもの陸續として絶えぬ門前市を爲し人皆其拾集の博洽あるに驚かざるものなりしと後ち君再び社友を伴ひ勢州菰野山に探採し是れ山野跋涉の最終期となす其文政三年初めて植物採集に従事せしより此茲安政五年に至るまで宛も三十八ヶ年にして其間高山幽谷に入り或は深林廣澤を涉り全國殆んど足跡の至らざる所なく積年尙一日の如し堅忍不拔の志を有するものに非ざんば豈に能く此に至らんや

安政六年藩侯舉て寄合醫師とあし七人録を給して洋學翻譯教授を命ず文久元年幕府召して蕃書調所出仕を命じ二十人録并に金十五兩を賜ひ更に藩侯より金十兩を給與せられ尋で物産局教授となり同しく

二年に種痘法創業の功勞により藩侯より銀五枚を賞與せられ其翌年横濱在留の阿蘭陀醫師某に就て博物學研究の命を受けて全港に在勤せり此時に當て君大勢一變の迫れるを察し職を辭して歸郷を慶應元年藩侯再び舉て奥醫師見習となし給するに切米廿五石并に録五人口を以てを時に君齡六十三なり

明治三年十二月大學出仕(少博士准席)仰付らる同四年七月文部省出仕仰付らる八月文部少教授に任せらる九月編輯權助に任せらる同五年四月文部省七等出仕仰付られ博物事務を命せらる同六年九月正七位に叙せらる全月位記返上仰付られ在職滿一ケ年以上ありしを以て金五十圓下賜せらる同七年植物鑑定の報として博物館より金廿五圓贈與せらる同八年小石川植物園へ勤務を命せらる同十年一月東京博物館より金四十圓贈與せらる二月同斷金廿五圓五月東京大學總理より植物調査を囑托せられ報酬として月給金四十圓を受く九月東京大學

理學部員外教授の任を囑せられ月俸金五十圓を給與せらる全月内國勸業博覽會審査官并に教育博物館兼務仰付らる同十一年審査事務勉勵の賞として萌黃純子一卷白羽二重一疋下賜せらる同十二年月俸金七十圓下賜せらる同年博物館より金廿五圓贈與せらる同十三年十一月瑞典國大學校より銀牌を受く同十四年七月東京大學教授に任じ年俸八百四十圓下賜し理學部勤務を命せらる九月正六位に叙せらる同十五年六月勳五等に叙せらる九月先年伊國開會萬國地學協會に日本産物志(君の著述)出品の賞として銅牌を受く同十六年十二月從五位に叙せらる同十七年六月編輯局兼勤仰付らる同十九年三月非職を命せらる同廿一年五月理學博士の學位を授けらる時に君八十六歳の稀齡なり

其の著はそ所の書は泰西本草名疏三卷、救荒食物便覽一卷、表忠詩鈔若干冊、硝石篇三卷、暴瀉病手當人心得書一卷、植物圖說一卷、日本産物誌若

千冊等ありて大に世に行はる
君人となり温厚着實人に對して毫も挾む所なし又蘭獨英の三學に通
し其嘗て翻譯したるところの書類は堆積して山を爲し枚舉に遑あら
ざと云ふ

野史氏曰君は天資慧發の才と三十八ヶ年の研究と七十ヶ年の經驗と
を以て遂に大に植物學の蘊奥を極むるを得たるは何ぞそれ盛ある
や吾聞く歐米の諸博士中大に君の學識經驗に敬服するものありと嗟
是れ君の一大名譽にして抑亦帝國教育上の光榮と謂つべきあり

醫學博士高木兼寛君小傳

君は東京の人舊鹿兒島藩士あり嘉永二年九月十五日を以て日向國諸
縣郡穆佐郷に生る幼名を藤四郎と呼ひ父は郷士にして通稱は喜助諱
は兼次にして母の名は園子なり家世々武を以て藩侯に仕へり

安政三年君歳甫て八歳同郷中村某の門に入りて和漢學を修めて嶄然
頭角を露はし萬延の頃ひに阿萬孫兵衛の門に入りて劍法を習ひ後ち
又鎗弓術を講せり慶應二年毛利某に従ひて鹿兒島城下に至り再び劍
法を學びしが一朝時勢に感ぜる所ありて忽ち劍を賣て書に代へ洋醫
石神良策の門に入りて醫學を修む其意蓋し師は藩兵の京都守衛兵隊
附醫官たるを以て之に隨行を乞はんと欲するあり偶ま師良策京都よ
り下國し將に再び上都せんと君之が隨行を請て許され遺憾に堪
へざ強て之を請ふ亦許容されず是に於て喟然嘆して曰く吾事已めり
と則ち去て又岩崎俊齋の門に入りて蘭學を修む時に明治元年四月師
俊齋藩命を帯びて上都し官軍の負傷者を治療するに當り君亦跡を追
ふて上都し至れば則ち豈に圖らんや師突然鬼籍に入るの翌日ありさ
君大に驚き爲る所を知らざ遇ま同藩士爲めに之を周旋して以て官軍
治療院の助手たらしむ爾來日夜病牀間に服務して怠ることなし同年

六月奥州白川口及岩城平の賊兵猖獗を極むるを以て藩主島津修理大夫忠義兵を率て應援せるに當り君乃ち病院補役となりて隨行せり此時官軍の一傷卒あり銃丸の右背部より胸部を貫通して右胸の皮下にあるを認知するも藩醫の之を摘出するものなく且つ野砲の彈丸にて膝關節の一部を射傷せられたる一士あるも藩醫にして之を處するの法を知るものなし偶ま大村藩醫の手術を乞ふて之を治せり其他藩醫の療する所のものは一として其施療法に適ふものなく只多くは創口に縁膏を貼して其排泄物を抑止するのみ大村藩醫之を評して曰く貴藩兵士は孰れも一騎當千人皆其勇に驚かざるはなし然れども獨り醫術施療法の區々なるに至つては亦一齷を喫せざるを得ざり於是君慨然怒て藩辱を雪ぎ且つ醫學の蘊奧を極めんことを決心せり

明治元年十一月軍平で鹿島に歸り一書を父に送り且つ請て曰く兒不肖既に過分の學資を仰ぎ以て今日に至る未だ一業の見るべきものあり

し然れども天下の名醫たらんと欲するものは固より數年の學業を積むに非ざんば不可となす自今兒薪を枕とし粥を喫り以て大に爲す所あらんとす幸に尊慮を勞する勿れ其學資の如きは兒に十三兩あり以て學資とあそべしと既にして上京し開成學校に入りて蘭學、數學、理學等を學び又英學を修めり同二年藩の英醫ウヰリアム、ウヰリアスを聘して病院及醫學校を設立するに際し君亦共に鹿兒島に赴きて生徒に教授し又塾頭を兼ね同五年二月兵部省に召されて將に上京の途に上らんとす或は之を諭止するものあり君確然として動かす遂に上京の途に就けり其嘗て校にあるや常に罪人行倒等の屍を解剖して以て學術上の研究に充てり

明治五年四月海軍省四等出仕仰付らる十月海軍中軍醫に任せられ十一月海軍大軍醫に任せらる同六年八月一等月俸下賜せらる同七年三月正七位に叙せらる七月海軍少醫監に任せらる十一月從六位に叙せ

らる同八年六月本官を免じ位記返上仰付らる同月海軍生徒申付られ
醫學修業の爲め英國留學命せらる九月セントトーマス病院醫學校に
入學と同年解剖學を修業す同十一年外科學校に於て「メムバルシツ
プ」の「ディプロマ」を受け又内科學校の「ライセンシエート」の「ディプロマ」を受
く同十二年解剖學の試験に高點を得て一等賞銀賞牌を受け續いて再
び金賞牌を受く同十三年外科學校「フェロシツプ」の「ディプロマ」を受けて
歸朝と十二月海軍中醫監に任し海軍病院長仰付らる同十四年一月正
六位に叙せらる十月海軍大醫監に任せられ十一月從五位に叙せらる
同十五年二月醫務局副長兼務仰付らる六月海軍々醫大監に任せられ
八月一等月俸下賜せらる九月醫務局學舎長兼勤仰付られ十二月慰勞
金二百圓下賜せらる同十六年二月内務省御用掛兼勤仰付られ十月脚
氣病調査委員を命せらる同十七年一月臨時調査委員命せられ五月恩
給調査委員命せらる十二月軍醫本部長兼軍醫學舎長に補せらる同十

八年十二月海軍々醫總監に任せらる同十九年一月海軍衛生部長に補
せられ七月正五位に叙せらる十月從四位に叙せらる同廿一年三月臨
時醫務檢閲檢査官仰付られ五月醫學博士の學位を授けらる
君は成長の役親しく軍中にあつて大に經驗を極めり其後ち海軍に仕
へて大軍醫の官に進むや海軍省君をして洋行せしめんとせしも事故
ありて上の許さざる所となれり其の後ち君私費を以て洋行せんことを
企て之を英人ウイリスに謀る氏大に之を賛成せ然れども其の費途の
路なきに苦む遇ま縣令大山綱良長崎にあり之と邂逅して大に謀る所
ありしも事成らざして止みたり爾來君洋行の念は益々切にして止ま
らんと欲るも止むると能はざ遂に當時海軍病院事務長なる前田獻吉
を見て説て曰く先生苟も余を以て凡庸視せられ事を爲すに足らざと
せば則ち已まん然れども苟も事を爲すに足るべしと爲さば宜しく余
をして海外に遊ぶの機會を得せしめよ是れ只余の私請のみならず抑

亦國家の爲なりと氏直に諾して洋行の運に至らしめたりと以て君の醫學に熱心あるを見るべし

君又脚氣病理の研究に心を傾け大に發明する所あり現に海軍部内に君の調理法によりて二三年以來殆んど其根を絶つに至る又成醫會日本醫會東京慈惠醫院等に於ても大に盡す所あり就中慈惠會の如きは明治十四年一月開會以來今日に至るまで開會數宛も三百九會にして其内君の欠席せしは纔かに六七回にして其内公務事故等を除けば單に四回のみ病氣欠席せしと云ふ

野史氏曰人一たび君の傳を讀過せば忽にして感に入り忽にして快と稱し其志操の鞏固にして百折不撓の氣慨あるに驚かざるべからざる呼後世醫を以て起るもの宜しく此の如くあらんばあるべからざるあり

工學博士長谷川芳之助君小傳

君ハ東京の人舊唐津藩士なり安政二年十二月十五日肥前國唐津に生る父の名は久徹頗る藝術あり和漢の學に通し又劍法を能く君八歳始て藩立學校に入て漢學を修む是時に當て父は藩侯に從て四方を遊歴し留て大坂に在り因て君大坂に登り今の元老院議官河禮之氏に就て英學を學び尋て大坂開成校に入て英書を講し明治五年貢進生となつて大學南校に入り後ち開成學校と成るに及んで専ら化學を修む八年七月官之を拔で、米國留學を命を依て之に航し十月新約克府「コロンビヤ」大學に入て鑛山學科を修め十一年六月全科を卒業して「インシニール」ナブ「マインズ」の學位を受け十一月同大學の鑛山學校に於て「メダル」タルシ科の「ザオル」ニア「シナイ」へ轉學し全州「カリホルニア」近傍諸鑛山を研究し十三年八月に至て歸朝を君の歸朝をるや直に三菱社に聘せられて爾來全社の諸鑛山を監督し採掘事業勃然として興起し

其功蹟頗る著しるしと云ふ
 是より先き君の三菱社に聘せられて將に之に應せんとするや或人之
 に謂て曰く官仕は尊くして民業は卑し且つ官職は強くして民職は弱
 し今先生は其尊きものに就かざして卑きものに就き強きに依らざし
 て其弱さに従ふ豈之を識者の策と謂ふ可んやと君笑て答へと徐ろに
 立て英米商業史を出して之に示と其人愧て退くと亦以て君の大意あ
 るを知るべし

野史氏曰く當今有力者にして其民間事業に従事する人果して幾許ぞ
 や實に寥寥指を屈するに足らざる可し夫れ邦國の隆盛を來さんと欲
 せば勉めて民間の事業を擴張せんとはある可らざるなり故に苟も志
 を遠大に持てる者は固より目下の利害を顧みるに遑あらざるあり彼
 の滔々たる眼を黃白の爲に眩し腰を五斗米の爲に屈するが如きは更
 に取るに足らざるなり

文學博士重野安繹君小傳

君字ハ士徳成齋と號と舊鹿兒島藩士なり文政十年十月六日を以て鹿
 兒島城下に生る天資鋭敏才藝あり少にして藩設學校に入りて和漢學
 を修め年較長じて江戸に遊び尋で昌平黌に入る刻苦勉勵業大に進む
 後ち舎長に擧げられ名聲忽ち四方に廣まる藩主島津侯之を聞き擢で
 一邸學を督せしむ君命を受けて大に盡す所あり既にして之を構する
 者あり遽かに事に坐して薩の南島に流竄せらる是れより益々力を讀
 書に專にし業浸焉として進む後ち赦に遇ふて歸る會ま英艦薩藩と俄
 に兵端を開くの事あり朝廷詔して幕府及諸藩を徵して將に大に議を
 る所あらんとぞ島津侯上國せんと欲それども英艦の虚に乗じて來襲
 せんことを憂ふ退て國を守らんか朝命を如何ん是に於て君密命を受け
 て横濱に赴き英國公使に會して大に其理否曲直を辨論し遂に和を講

して歸れり侯因て意を上國に専らそにるとを得たり維新の後君大坂にありて大に學生を薰陶そ四方笈を負ふて來り學ぶ者甚多し
 明治四年十二月文部省八等出仕仰付らる同五年五月中議生に任せられ編纂局勤務を命せらる六月正七位に叙せらる九月地方課勤務命せられ十月左院三等書記官に任せらる全月地誌編輯兼務仰付らる同六年一月二等書記官に任せらる二月從六位に叙せらる九月編輯課長に任せらる同七年四月六等出仕に補せらる同八年四月修史局副長仰付らる九月一等修撰に任せられ十月正六位に叙せらる同十年一月一等編修官に任せらる三月從五位に叙せらる同月編修副長官に任せらる四月勳六等に叙し單光旭日章を賜ふ同十七年九月東京大學教授に兼任し文學部勤務仰付らる同十九年編修局編修長に任じ奏任官一等に叙せらる同廿一年五月文學博士の學位を授けらる尋で正五位に叙せられ十月元老院議官に榮轉そ其著そ所の書萬國公法和譯編年日本外

史等ありて共に世に行はる

君の漢學に於ける専ら實用主義を取り主として漢弊を脱去せし故に今日大に擢用せられて身は顯官にあり其人に接する周匝致らざるなく雅俗並び至る是れ其著るしく漢儒中に卓出する所以あり或る人君を評して曰く子徳に七絶あり一は博學二は文三は詩四は棋五は鼓六は脱弊七は吾れ之を忘れたりと以て其才藝達せざるものあきを見るべし

君の文章は健雅嚴整魏叔子の文を讀むが如く人をして一見君の文たるを覺らしむ又常に漢學の衰頹に歸せるを慨嘆し屢々斯學の講せざる可らざるを痛論そ主意確立聽くものをして敬服せしむ

野史氏曰漢學は東洋の哲學にして決して之を衰退せしむ可からざるれども漢學の往々社會に擯斥せらるゝ所以のものは何ぞや是れ其學の罪に非ざるを學ぶ者の罪のみ豈亦思はざる可んや

法學博士鳩山和夫君小傳

君は東京府の人舊眞島藩士なり安政三年四月三日江戸虎の門内眞島藩邸内に生る父の名は博房文事に通せり君少より魁偉常に静默の評を受く然れども苟も事に臨めば亦最も敏捷にして他童の及ぶ所に非き其嬉戯を爲そ己れ必き之か巨魁たり長そるに及で大に學業に志し孜孜として倦まき後ち大學南校に入りて普通學を修め續て開成學校に轉じ専ら法律學を修む時に學術最も優等にして常に其一位を占め未だ嘗て他人に席を譲らざりしと云ふ

明治八年七月君年十九法學修業の爲め米國留學を命せられ十月米國新約克、コロンピヤ大學へ入學し凡そ一ヶ年半にして同大學を卒業して法律學士の學位を受け明年六月コンチクナカット州、ニューヘブンス府大學校に於て法律博士の學位を受け同十三年七月更に法律大博士の學位を受けて歸朝と時に年僅に二十四あり

明治十三年八月法學部講師の任を囑せられ月給金百圓給與せらる同十五年一月以來代言人となれり同十八年四月外務權大書記官に任せらる五月外務取調局長仰付らる六月正六位に叙せられ十一月參事院員外議官補に兼任し十二月翻譯局長心得仰付らる同十九年三月外務取調局長兼翻譯局長に任せらる四月奏任官一等に叙し下級俸下賜せらる同月法科大學教授に兼任し奏任官二等に叙し年俸四百五拾圓下賜せらる七月從五位に叙せらる同廿年三月兼官を辭す九月葡萄牙國皇帝陛下より贈與されたる「コンマンドール、ドロール、ロアヤル、ミリナール、ポルナユゲートド、ノートル、セニユール、セ、シユキリスト」勳章を受領し且つ之を佩用せらるを允許せらる十月高等文官試験委員仰付らる十二月法科大學教授并に法科大學教頭に兼任し奏任官一等に叙し年俸八百圓下賜せらる同廿一年五月法學博士の學位を授けらる始め君の洋行を命せらるゝに當り菊池博士、小村、齋藤の二學士も亦共

に派遣せらる然れども二氏は同國大學を卒業するや直に實地の業に就き或は行を装して歸國の途に就くも君獨り心に慮る所あり遂に留て大博士の學位を得たり其卒業授與式に臨みて君一場の演説をなし滿場大喝采を博したりと云ふ蓋し卒業生にして席上演説をなす者ハ從來米國に於て尤も稀なる所にして其之を爲す者は最優等生に非ずんは決して之を爲さざと況んや君ハ外邦人にして此榮譽に與りたるハ一大名譽と謂はざる可らざ

君人ト爲り沈毅大度にして喜怒色に顯はれ老人に接する常に温顔を以て之故に嘗て代言職にある大に人望を得たり

野史氏曰我大學出身の諸學士中其學術尤も優等にして又其最も高官に登れる者は獨り君其人なり吾れ之を推して維新後の人傑と謂はんと欲するあり

理學博士山川健次郎君小傳

君は青森縣の人舊會津藩士なり家世々松平侯に仕へ父直一に至て家老役を勤め子三人を生む君其末子にて安政元年七月十七日陸奥國會津郡若松町に生る幼にして家庭の教訓を受け齡僅かに六歳既に四書素讀を了り十歳の頃藩立日進館に入て漢籍を修め明治二年を以て始て上京英學を修め三年工學修業として魯國へ留學を命せられ明年更に米國留學の命を受けて之に航し尋て同國「ニューヨーク」の大學に入て凡三ヶ年間物理學を修め「バチエロル、ナフ、フヒロツフェー」の學位を受領して八年に歸朝す

明治九年一月東京開成學校教授に任じ月俸七拾圓下賜せらる同十年四月東京大學理學部教授補に任せらる八月理學部助教に任せらる九月月俸百圓下賜せらる同十二年七月東京大學理學部教授に任じ月俸百二十圓下賜せらる同十三年十二月月俸百五十圓下賜せらる同十四

年七月年俸千八百圓下賜せらる九月從六位に叙せらる同十五年四月英佛度目商議委員仰付らる十二月年俸二千圓下賜せらる同十九年三月理科大學教授に任せらる四月奏任官二等に叙し下級俸下賜せらる七月正六位に叙せらる同廿一年九月中級俸下賜せらる同廿一年五月理學博士の學位を授けらる又中學師範教員學力試験委員を命せらると前後三回とぞ

始め戊辰の役會津閻藩兵燹に罹り老若の溝壑に顛し妻子は散じて四方に行く三十五萬石の城下忽ち一片の煙と化して浙盡蕩滅亦形跡の見るべきものなし是に於て君慨然郷を去り遂に學業に身を寄せたりと云ふ其兄は陸軍少將山川皓君其姉は前の宮内省出仕(年俸一千圓)山川操子にして皆世に聲譽あり就中少將は西南の役拔群の勳功を立てり其人と爲りや剛邁廉潔にして朝野共に人望あり又操子は英學に通じ貞操を以て名あり人或は山川博士を推して理科大學中第一等の人

物とするも故なきに非ざるなり

野史氏曰兄弟秀逸君家の如きものは世の尤も稀れある所なり語に曰く愷悌の君子は兄に宜しく弟に宜しく以て一家を治むと山川家の謂なり

醫學博士大澤謙二君小傳

君は愛知縣の人舊豊橋藩士なり神職大林美濃の四男にして幼にして家庭の教育を受け齡始て十一吉田藩の侍醫大澤玉龍の養子となり年十四の頃ひまで藩儒小野湖山の塾に入て漢學を修め其明年出京し醫學所に入て今の田代基徳并に渡邊洪基氏等に就き英語を學び後又島村鼎石井信義等の教授に就て解剖、生理學、藥物病理學等の講義を聴けり君幼名は右近次後に謙二と改む嘉永五年七月三日三河國寶飯郡當古

村に生る天資穎悟少より醫學に志し維新の際慮る所あり足立寛に従ひ江戸を去て遠州に赴き専ら英語を修め慶應二年十月再び上京して醫學所に入り凡そ二ヶ年間醫學を研究し明治二年五月句讀師に擧げられ三年大學中得業生に進む尋て獨乙國へ留學を命せられて之に航し伯林醫學校に入て獨逸語、羅甸語、數學、動植、理、化、解剖、比較、同胎生、生理學等の諸科目を修め七年六月理科試問に及第して「カンジダート、デルメシ」の稱號を得て歸朝し十一月東京醫學校に雇はれ月給七十圓を受け尋て二等教諭に任せらる九年十月東京醫學校五等教授の任を囑せられ月給百二十圓を賜ふ十一年二月本官を辭し自費を以て再び獨逸國に留學し四月「ストラスボルク」府大學校に入學して生理、藥劑、病理解剖、組織、産科、眼科、耳科、内外科、精神病學、裁判醫學、衛生局處解剖、小兒科、婦人科等の十餘科目を研究し十五年九月遂に醫學博士の學位を受け尋て歸朝と

明治十五年十二月東京大學教授に任じ年俸二千四百圓下賜せらる同月醫學部勤務を命せらる同十六年二月正六位に叙せらる十二月諮詢總會々員に撰擧せらる同十七年二月醫學部試業規則取調委員を命せらる九月學藝志林編纂事務委員を命せらる十二月中央衛生會委員仰付らる同十八年二月醫學部得業士試問規則起草委員を命せらる四月教授講談の細則取調委員を命せらる五月大學文學部兼務仰付らる十月二月醫學部長代理仰付らる同十九年三月醫科大學教授兼教頭に任せらる同月帝國大學評議官を命せらる四月奏任官二等に叙し上級俸下賜せらる六月脚氣病審査委員長心得を命せらる同廿年一月東京慈惠醫院商議委員仰付らる二月尋常師範學校博物科用人身究理書編纂委員を命せらる同月脚氣病審査委員長心得を解かる九月帝國大學衛生委員を命せらる同廿一年二月奏任官一等に陞叙せられ下級俸下賜せらる五月醫學博士の學位を授けらる又中學師範教員學力試檢委員を

命せらるゝと四回なり
君獨逸に留學すると二回大に醫術の蘊奥を極む昨年官擧て教頭の重
任に當らしむるや君益々學徒を教導し諄々として未だ曾て倦まざる
生徒咸之を景慕すと云ふ
野史氏曰本邦學術上の進歩最も著るしきものは醫術の進歩に如くも
のなく外人亦之を驚嘆せりと云ふ是蓋し先進の誘導其宜きを得るの
致す所あり

工學博士原口要君小傳

君は東京の人舊長崎天領士あり少より穎敏晨に英學を修め明治の初
年に笈を負て上京し大學南校に入て普通學を修め後開成學校と變じ
て工學を專修せり八年官俊秀の生徒數名を撰で海外に留學せしむる
や君其撰に當りて米國に遊學し同年八月「ツロイ府」レンセレー「工學

校に入學し凡三ヶ年にして全科卒業土木工學士の學位を受け爾來專
ら工業實地研究に従事し十二年六月に至て新約克「アラウエール」橋梁
會社の工事に就き其後君同社の爲に一の鐵橋架設工材を發明し「ペニ
シルベニア」州の「ヒツッポルグ」に於ける製鐵所に入て親ら其自製の製
鐵監督を爲し其竣功の期を待て同國を去り英佛蘭獨四ヶ國を經歷し
て十三年十月に至て歸朝せり君の歸朝するや東京府に擧げられて其
工事を擔任し大に盡そ所あり尋て工部省少技長に任じ從六位に叙せ
らる十九年鐵道二等技師に昇進し奏任官二等に叙し上級俸を賜ひ正
六位に叙せられ今年五月工學博士の學位を授けらる目下東奔西走日
々鐵道工事を監督し年間殆んど家居の時ありと云ふ是れより先き彼
の有名なる府下吾妻橋鐵橋架設一大工事の如きも全く君の計畫に成
れりと以て其學力經驗の至れるを見るべし君は嘉永四年十一月七日
を以て長崎港に生れり

野史氏曰人世の一大快事は其身の繁務なるに若くものある可からず彼の悠々閑々空しく拱手して六尺の身体置くに所なきが如きは豈亦愧づ可きに非ぞや

文學博士島田重禮君小傳

君字は敬甫葦村と號と舊村上藩士あり其先美濃の土岐氏より出づ伊豆守滿貞別に邑を駿河の島田に食む因て氏とそ若狹守重國足利義晴に仕ふ後故ありて武藏の大崎に隠れ世々名族たり父重規に至て七男二女を擧ぐ君は其第八子なり天保九年八月十八日を以て荏原郡下大崎村に生る幼にして穎悟群兒に異あり嬉戯常に好て筆硯を弄と四五歳の頃ひ善く字を識る父嘗て頂を撫で、曰く此兒後必そ文學を以て名を成んど不幸にして五歳母を喪ひ七歳又父を喪ひ仲兄尋て没そ其家に在るものは惟伯姉のみ

君嘗て伯兄の先哲叢談を讀むを聞き慨然覺るところあり儒を以て家を興さんと欲そ是時に當て資産漸落ち以て其學資に供する能はせ伯姉其志を察し絰績以て學資を助く君感奮終霄忘るとなし里人指して癡呆となそ年十五大澤赤城に従て學び次に海保漁村に就て大に經子史學を傳習し年二十二安積良齋に従ふ居ると幾くもなくして良齋没そ由て家に歸り苦學自ら究む年廿六唱平嶺に入り意を肆にして博く百家の書を涉獵し學大に進む鹽谷岩陰深く其才を愛し配するに其孫女を以てそ慶應元年唱平學大試に應じて甲科に登り金幣を賜ふ同年九月拔擢せられて唱平學助教となる三年十二月外國調役並を命せられ既にして之を辭そ時に君駿河臺に僑居し赤貧洗ふが如し然れども毫も志を變せそ村上侯之を聞き聘して儒員たらしめんとそ君固辭して就かそ侯其志を嘉し待つに賓師の禮を以てし歲祿百石を贈り教職を囑そ君乃ち俸に就く後ち困幡の支封池田侯其宗藩に請ひ厚祿を以

て之を聘を辭して就かば侯其志操に感し躬から來り學ぶと云ふ
 明治七年二月東京師範學校雇教師申付らる五月五等教諭に任せらる
 同八年十二月修史局三等協修に任せらる同十二年九月東京大學文學
 部講師の任を囑托せられ月俸金五十圓給與せらる同十三年九月月俸
 金七十圓給與せらる同月東京女子師範學校修身講義を囑托せらる同
 十四年八月東京大學教授に任せられ文學部勤務仰付らる九月從六位
 に叙せらる同十六年二月正六位に叙せらる三月年俸金千二百圓下賜
 せらる同十七年九月年俸金千八百圓下賜せらる同十九年一月文科大
 學教授に任せらる四月奏任官二等に叙せらる七月教科用圖書檢定委
 員を命せらる九月中學用漢文教科書編纂委員仰付らる同廿一年五月
 文學博士の學位を授けらる九月東京府に轉籍と十月奏任官一等に陞
 叙せらる

君是より先き明治二年塾を下谷の長者街に開き雙桂精舎と稱し明年
 居を練屏坊に移し時に名聲漸く遠近に聞へ翕然笈を負ふて來り學ぶ
 者日々相繼ぎ數月からせして學會皆滿つ君又資性羸然善病にして勝
 へざるが如し然れども必は夙に起て講堂に臨み沍寒炎暑の候と雖と
 も未だ曾て怠らざり其子弟を律するや頗る嚴肅にして毫も假貸する所
 なし然れども師弟の間は城府を誤けず相親む一家の如し又嘗て安井
 息軒芳野金陵等と忘年の交を爲せしとあり二氏亦深く其才學を稱せ
 と云ふ

君常に教育を以て自ら任じ其門下薰陶を受けて成就する者甚だ多し
 今年君歳五十一著と所の文集若干卷雜著數種未だ梓に上らざり其學博
 覽旁通考据を主とし幼より顧炎武の人となり慕ふ又伯姉を養ふと
 廿餘年尙一日の如し平生他の嗜好なし只甚だ書籍を好み常に王白田
 の語を誦と故に窮迫の中にありと雖も衣食を節して書を購ひ一本を
 得れば隨て讀み遂に堆積萬卷に及べりと云ふ

野史氏曰君史子、百家の書に至る究めざるものなく就中尤も經書に精通と一世の碩儒と謂つべきなり

法學博士穗積陳重君小傳

君は東京の人舊宇和島藩士なり安政二年七月十一日を以て伊豫國宇和島仲之町に生る父を重樹と稱し藩主に仕へて物頭役を勤め考祖より藩校の和學教授たり君は其長子にして七歳始て讀書し尋で明倫館に入て漢籍を修む此時に當つて父は藩命を以て江都に在り専ら慈母三遷の教を受く

君の母は賢女あり尤も教育に心を盡し常に君に語るに楠公父子或は赤穂義士等の忠蹟を以てし切々として鍼戒を加ふ君亦心肝に銘じて之を記と然れども君和學を以て家を繼ぐの志あく専ら漢籍に心を傾けり年十五の頃嘗て劍柔術を講じ又洋式練兵に従事せしが時勢の變

遷と共に一朝之を廢し再び志を學に寄る時に慶應二年なり

明治三年藩立明倫館の培養生長に擧げられ尋で貢進生となりて上京大學南校に入り後ち開成學校と變じて法律學を專修と九年六月法學修業の爲め英國留學を命せられ十月倫敦キングスコルレッジへ入學し幾許もなくして又「ミッドルテンパル」へ入學して凡そ三ヶ年にして同校を卒業し「ハリスナル、アト、ロー」の學位を受く十二年四月英國を去て獨逸國に赴き伯林大學に入つて更に法理を研究し十四年六月に至りて歸朝せし是れより先き君の伯林大學に在るに當り偶々瑞士國に於て萬國公法會議の擧あり此時君は我英國駐在の森公使に隨行して之に臨み痛く治外法權の弊害を演説し滿場の喝采を得たりと云ふ

明治十四年七月文部省准奏任御用掛を命せられ年俸千二百圓下賜し大學法學部講師の任を囑せらる八月諮詢總會々員に撰擧せらる十月文學部講師兼務を命せらる同十五年二月東京大學教授兼法學部長に

任じ年俸千五百圓下賜せらるる三月正七位に叙せらるる四月文部少書記官に兼任す六月從六位に叙せらるる十二月年俸二千百圓下賜せらるる同十八年四月年俸二千四百圓下賜五月正六位に叙せらるる十二月法學部長心得を命せらるる同十九年三月法科大學教授兼教頭に任せらるる同月帝國大學評議官を命せらるる四月奏任官二等に叙し上級俸下賜せらるる同廿年十月高等文官試験委員仰付らるる十二月願に依り兼官并に評議官を免せらるる同廿一年五月法學博士の學位を授けらるる

君の持論の主として法學の蘊奥を研究して其法理の正鵠を得るにあり故に苟も學理に遠ざかるものは捨て、之を取らざ然れども彼の徒らに空理に流れて反て適用の道に戻るの類に非ざるなり是を以て君の學生を教授する懇々學理に基て之を説き嘗て輕忽に附し去るとなく其教場に登るや滿堂肅然として聲なく皆其講義を傾聽そと又巖に大學教頭并に評議官の任を懇請して之を辭したるも其意蓋し專攻の

目的に外あらずと云ふ

野史氏曰志を一藝に盡さんと欲する者は固より博涉主義の多能を有そ可からず耕の事は農夫に若か器の事は工人に若か況んや學業に於てをや

理學博士菊池大麓君小傳

君は東京の人なり安政二年正月廿九日江戸津山藩邸に生る父を箕作秋坪と云ふ夙に蘭學を修めて世に稱せられ後又英佛二學に通し洽く海内に其名を知らる惜哉近年病没を傳は載せて當時の新紙に在り君の其長子にして故あり本性を繼て今の姓を冒そ君天才秀逸最も記憶力に強し慶應二年を以て始て英國に航し幾許くもなくして歸朝大學出仕に擧げらるる明治三年十一月再び官費を以て英國に留學し普通學を修むると三年にしてケムブリッヂ大學に入り五ヶ年にして之を卒

業し「ハナエロル、オブ、アーツ」の學位を受け尋て歸朝と

明治十年六月東京大學理學部四等教授の任を囑せられ月俸百五十圓給與せらる同十三年三月月俸二百圓給與せらる同十四年六月「ケムブリッヂ」大學より理學博士の學位を授けらる七月東京大學教授兼理學部長に任じ年俸二千四百圓下賜せらる八月諮詢總會々員に選舉せらる九月正六位に叙せらる同十五年四月英佛度目商議委員仰付らる十二月年俸三千圓下賜せらる同十六年一月子午線零點及計時普通法協議委員仰付らる二月學位試問規則取調委員を囑せらる同月從五位に叙せらる五月地球上一定の子午線零點并に計時普通法設定公會開設に付委員として米國へ派遣仰付らる同十七年三月英國博覽會出品事務取扱仰付らる七月米國及歐州へ向け出發同十八年六月歸朝と十一月大不列顛理學獎勵會通信員に選舉せらる同十九年三月帝國大學評議官を命せらる四月奏任官一等に叙し上級俸下賜せらる十一月倫敦

數學會員に選舉せらる同廿年八月日蝕皆既觀測の爲め福島縣下白河へ出張を命せらる同廿一年五月理學博士の學位を授けらる

君に二弟あり一は理學博士箕作佳吉君次は理學士箕作元八君にして今又獨逸に留學せり

是れより先き君の「ケムブリッヂ」大學に在るや數理學に於ては常に優等にして未だ曾て同輩に後れを取らざりしと云ふ是に由て之を觀るときは其人たる慎沈周密甚だ考案的の腦力に強きは推して知るべし方今數學家を以て其名海内に聞ゆる寔に故あるあり君又數學の著書若干あり大に世に行はる

野史氏曰博士中其兄弟にして悉く學者或は英才にして一人の不肖者なきは只山川家と寺尾家と櫻井家と君が家とのみ將に之を稱して四

理家の四幅對とあそびなきなり
白土と云ふ大自書に族傳傳記あり二弟を述べては「君は元八君に似たり」とあり

醫學博士三宅秀君小傳

古人云へるあり醫三世あらざれば其藥を服せずと蓋し醫は元と大業にして必き學力と經驗とを要すべきの謂あり豈之を戒めざる可んや君は東京府の人舊金澤藩士なり嘉永元年十月十七日を以て江戸本所縁町に生る父を佐藤泰然と云ひ肥前島原の人なり佐倉候に聘せられ醫を以て業とす

君幼名を復一と呼び少より穎悟學を好む安政五年始めて蘭書を學び後ち更に英語を修め文典究理書等を傳習して文久三年を以て佛國へ航し留學二年にして歸朝と藩學で致遠館教授となし又英文翻譯に従事せり其後進を誘導するや懇切至らざる所なく闔藩靡然として風教に浴と

明治三年三月大學出仕仰付らる同四年八月文部大助教に任せらる同五年一月文部少教授に任じ正七位に叙せらる同七年十月東京醫學校

長心得を命せられ續いて三等教授に任じ一ヶ月金百八十圓給與せらる同八年二月二百圓給與せらる六月文部五等出仕に補せらる同九年三月奉職五ヶ年以上に付其賞として金五百圓下賜せらる七月米國費拉特費府萬國醫學會に臨席の命を受けて出張し同會の副會長に撰舉せらる同十年四月東京大學醫學部三等教授の任を囑せらる十月銀盃一箇學校寄金附の賞として下賜せらる同十一年七月脚氣病審査委員并に傳染病豫防規則取調委員仰付らる同十四年七月東京大學教授に任じ醫學部長に補し年俸二千四百圓下賜せらる八月諮詢總會々員に撰ばる九月正六位に叙せらる十二月年俸三千圓下賜せらる同十五年三月從五位に叙せらる四月木盃一箇小學校寄附金の賞として賜はる六月勳五等に叙し雙光旭日章を賜ふ同十六年十月劍術柔術を体操の一科に加ふるの利害得失鑑定と命せらる

明治十八年十二月學士會員に撰舉せらる同月學術研究の爲め帶官の

儘私費を以て歐州へ航するに當り醫學校教育法等の取調を囑せられ其手當として金一千圓を交付せらるゝの命を受けて歐州へ出發を同十九年三月醫科大學教授兼醫科大學長に任じ奏任官一等に叙し上級俸下賜せらる五月帝國大學評議官を命せらる同廿年三月歸朝を同月脚氣病審査委員長命せらる六月醫學校取調委員を命せらる九月帝國大學衛生委員長を命せらる又歸朝以來醫史及裁判醫學の教授を分擔を十一月勳四等に叙し旭日小綬章を賜ふ同廿一年五月醫學博士の學位を授けらる

始め君の大學醫學部教授の任に就くや自ら請ふて其俸給を減せんとを以てそ其謙遜推して知るべし而して君病理學に於ては尤も長ずる所にして其他内外科理化學に至るまで修めざるものなし故に其生徒を教導する秩序亂れを學問淵源あり常に人に語て曰く本邦醫術未だ進まざり往々外人の容喙を免れず嘆まべきなり吾輩盟て此學の眞理を

研究して外人を凌駕せんことを勉めざるべからざると其慷慨熱心自ら任ざると如此宜なる哉君の醫科大學長となるや主任官嘗て案を拍つて曰く科長其人を得たり余復た心を此に勞せざると以て其爲人を知るべきあり其所著の書病体剖觀示要、病理總論、病理各論、治療通論等ありて大に世に行はる

野史氏曰醫は固より仁術なり人の生命を委托せられ社會の安寧を全うするの重任を負ふの術業あり彼の醫術的を目して商法的利己主義と誤解し徒らに華美驕奢を事とし藥價を以て九倍主義の營利を謀るが如きは更らに論するに足らざるなり嗚呼世の醫を以て業とする者此傳を讀まば亦以て少しく顧みる所あるべし

傳

工學士松本莊一郎君小傳

往年の夏期一友北海道より來る則ち數件を擧げ之に問て曰く其地政

令行はるゝか土地開けたるか土民安堵するか道路通るか鐵道敷かれたる歟五者孰れか其最に居る乞ふ之を盡せ某傾首較久し忽ち端坐膝を撃て曰く之れ在り矣政令行はれざるに非ざり土地開けざるに非ざり土民安堵せざるに非ざり道路亦通せざるに非ざるなり而して鐵道事業の竣功公私其便に依る是れ其一大最事と爲そのみと又問て曰く鐵道事業の竣功吾れ之を聞くを得たり抑亦何人の計畫に成り誰氏の監督に成れるや某突然答て曰く君知らせや松本技師其人ありと吾此に於て君の北地に大功あるを知れり君の岐阜縣の人舊大垣藩士なり嘉永元年五月廿三日美濃國大垣城下に生る資性宏達英敏夙に英學を修めて藩立學校の英學教授たり明治の初年奮然故山を背にして上京し大學南校に入れり時に洋學未だ盛ならせ其會々南校に入る者あるも多くは五里霧中に茫乎として其學の何たるを辨知する者は蓋し甚稀れありと此時に當て獨り君は既に洋學の資あるあり且つ天稟の穎才

あるあり忽ち官の選拔する所となり明治二年に米國留學の命を受けて之に航し爾來全國大學に入て工學を修め居ると凡そ五ヶ年にして全大學を卒業して歸朝するや直に東京府に擧げられ又大學に入て圖書の教授を爲し大に公務に盡す所ありしが時宛も彼の北海道鐵道架設の計畫あるに際し君則ち其事務副長とありて親ら之が畫策の任に當り孜孜切々遂に其竣功を告ぐるに至る功を以て勳六等に叙せらる其後十六年の交歸京して鐵道局の一等技師に擧げられ尋で奏任官一等に叙し上級俸を賜ひ從五位に叙せられ本年五月又工學博士の學位を授けらる方今日々全局に出勤して帝國鐵道事業擴張の計畫を擔任し細大悉く君の手を経ると云ふ

君人と爲り嚴正にして果斷あり故に事務を執る極めて迅速に萬裁立るに成ると云ふ

野史氏曰當今日進月開の世人々寸刻分秒を惜むの秋あり此時に當て

全道鐵道敷設の急務なる尙日を觀るよりも明かなり

文學博士小中村清矩君小傳

君其先は山城石清水八幡宮司より出せ寶永の頃ひに當て其祠弟某江戸に出で金工を以て業とそ世々相繼で父春矩に至れり君文政四年十月二月を以て江戸麴町に生る六歳にして字を識り能く假字草子を讀めり既にして郷塾に入て漢籍を學び又西島蘭溪の講義を聽けり廿二歳の時令義解公事根源等の書を讀み始めて國典專攻の志を起し伊能穎則に従ひて記紀以下の古典類を研究し安政年代本居内遠の門に入りて大に國典を傳習し業大に進む文久年間和歌山藩に聘せられて藩士に列せ爾來藩立古學館の國學教頭となり又幕府和學所頭取の嘱により同館にて令義解を講義せり

明治二年三月史料編修兼六國史校正を命せらる七月制度取調仰付らる全月大學中助教に任せられ十二月語箋編輯命せらる同三年十一月神祇權大史に任せらる同四年五月神祇大史に任じ從七位に叙せらる五月大嘗會取調を命せられ八月神祇省一等出仕に補せらる十月神祇大録に任せらる同五年四月位記返上と六月教部省八等出仕に補せらる同六年三月教部大録に任せらる同十年二月内務省准判任御用掛を命せられ月俸卅五圓下賜し社寺局勤務仰付らる同十一年九月東京大學法、文、二科講師の任を嘱せられ年俸百廿圓下賜せらる十二月内務省四等屬に任せらる同十三年四月文部二等屬に任せらる六月文部省准奏任御用掛を命せられ月俸六十圓下賜し編輯局勤務仰付らる同十五年二月東京大學教授に任じ年俸千二百圓下賜せらる同月諮詢總會々員に撰舉せらる三月正七位に叙せらる同月日本古今法制教科書編纂仰付らる六月東京學士會員に撰舉せらる同十六年五月從六位に叙せらる同十七年六月制度取調局兼務仰付らる九月年俸千五百圓下賜せ

らる同十九年三月法科大学教授に任せらる四月奏任官三等に叙し下級俸下賜せらる同月文科大學教授に任せらる九月中學校用和文教科書編纂委員仰付らる十二月古事類苑編纂委員長を囑せらる同廿一年五月文學博士の學位を授けらる六月帝室制度取調掛仰付らる十月奏任官二等に陞叙せらる又曩に曾て選述したる歌舞音樂畧史二卷を印行して世に公にせり

君は古典に精きのみならず大に邦法律沿革上に明かにして又最も國制律令に通せり故に其宿志は少壯より數十年來研究し來りたる法律歴史上の著述にあるも公務繁劇に因り未だ其志を果さざと云ふ今年君齡六十七日々大學宮内文部の三衙に出勤し疾病事故あるに非んば未だ曾て欠勤せざ老て益々壯かり豈人生の一大快事ならんや野史氏曰日本法律家たらんと欲するものは須らく先を邦令律典の沿革を考究し然る後泰西各國の法律を對照せば其實務に適すべきや蓋

し疑を容れざるなり彼の徒らに歐米の法律にのみ狂奔して邦令の沿革は恬として之を顧みざるが如き者は何の國益をかさんや猶木に縁て魚を求むると一般なり

法學博士田尻稻次郎君小傳

君は鹿兒島縣の人なり嘉永五年六月廿九日鹿兒島城下に生る資性宏達沈毅少より大志あり其群兒と伍と己れ常に之が旗頭たり長きるに隨ひ大に學に志し孜々として倦まざる嘗て郷塾に學ぶ消金の日互寒の夜に至れば健氣少く撓む乃ち學友と約して曰く某刻眠に就き某刻起床をべし若し此則に違ふ者は深夜早曉を論せざる直に冷水を以て其頭上に注ぐべしと既にして學友中往々違則し冷水を注がる者あるも君は未だ曾て之を受けしとなしと云ふ

弱冠の頃ひ慨然郷里を去て上京し大に英學を講習と明治四年官君を

拔で、米國に留學せしむ此に於て君躍然萬里一飛の思を爲し單身急裝全國へ航し直に「ハートホルト」中學に入つて大學豫備科を修むると凡そ三ヶ年にして「エイル」大學へ入學し十二年二月全科卒業得業士の稱號を得て更に一ヶ年間全校に於て研究生となりて經濟、財政、政治、歴史の四科を專修し學全く成りて歸朝と

明治十三年一月大藏省少書記官に任せらる五月從六位に叙せらる同十四年八月文部省御用掛兼勤を命じ東京大學文學部勤務仰付られ手當として年俸三百六十圓下賜せらる十月文學部講師の任を囑せらる同十五年七月手當金年俸四百圓下賜せらる同十七年十月文部省御用掛を免じ更に大學御用掛仰付らる同十九年一月大藏省國債局長心得仰付らる三月國債局長に任じ奏任官二等に叙せらる尋で正六位に叙せらる四月法科大學教授に兼任す同廿年十月高等文官試験委員仰付らる同廿一年五月法學博士の學位を授けらる

是れより先き君の「エイル」大學に在るに當り常に喋々辨論を爲そを好まむ其討論席に就くや未だ曾て一語を發せむ前後黙して辨論の要旨を聞き然る後論點結局の争に至り君始て大聲一喝忽ち雄辨を奮ひ僅々數語を以てして能く一場の大問題をして釋然冰解たらしむ校友以て及ぶ可らむと爲し皆其才能に驚嘆せしと云ふ

野史氏曰我邦經濟學者を屈指すれば實に寥寥數ふるに足らむ其間々經濟家を以て自稱する者ありと雖ども未だ以て眞の經濟家と爲るに足らむ嗟獨り君の如きは堂々眞正の經濟學大家たるべきなり

理學博士矢田部良吉君小傳

君は東京の人あり嘉永四年九月十九日伊豆國田方郡韭山に生る父を啓雲と云ふ夙に蘭學を修めて後ち伊豆の江川太郎左衛門に仕へ傍ら砲術を講し又醫書并に法律書を翻譯せむ然れども當時出版を許さず

れば空しく其筐底に藏めしと云ふ其交友の今尙存せる者の勝海舟原田一道氏の如き是かり安政四年病歿と君五歳にして父を亡ひ四方に周遊し韶齒の頃ひ駿州沼津に於て漢籍を學び慶應の始め土佐の人中濱萬次郎并に大鳥圭介氏等に就て英書を講じ後ち横濱に往て英學を修む

明治二年六月開成學校教授試補に擧げられ七月少助教に任せられ三年七月中助教に進み十月更に文書大令使に任じ森少辨務使の副役として米國へ派遣せらる四年八月外務權少録に轉じ五年九月本官を辭して専ら學業を修め續て「ニューヨーク州」コルチル大學に入學して官費留學生を命せられ九年六月全科卒業「パチエロル、オフ、サイエンス」の學位を受け尋で歸朝す

明治九年九月東京開成學校五等教授の任を囑せられ月俸百圓下賜せらる十一月博物館内植物園兼務を命せらる十二月東京博物館長の任

を囑せらる同十年九月月俸百三十圓下賜せらる同十二年七月月俸百五十圓下賜せらる同十三年十二月月俸二百圓下賜せらる同十四年七月東京大學教授に任じ年俸二千四百圓下賜せらる八月諮詢總會々員に撰擧せらる九月正六位に叙せらる同十七年二月學藝志林改良方法取調委員を囑せらる八月理學部長代理仰付らる同十八年六月英文讀本編纂委員仰付らる七月年俸三千圓下賜せらる八月從五位に叙せらる同十九年三月理科大學教授兼教頭に任じ植物園監督を命せらる同月帝國大學植物園管理を命せらる四月奏任官一等に叙し上級俸下賜せらる五月帝國大學評議官を命せらる同廿年二月尋常師範學校博物教科用人身生理書編纂審查委員仰付らる十月東京盲啞學校長に兼任と同廿一年三月東京高等女學校長に兼任と五月理學博士の學位を授けらる七月東京音樂學校商議委員を命せらる是れより先き中學師範教員學力免許試驗委員を命せらる、と前後四回にして又植物採集の

爲め各縣下に出張を命ぜらるゝと都て七回にして十六縣とそ
君人と爲り奇偉澹泊にして人に接する常に温顔を以てそ曩に君の小
傳を草するに當り一社友訪て其履歴を求む君突然出で來り笑て曰へ
止めよ矣余輩一書生のみ何の記すべきものあらんや君等將に一大博
士とあるべしと其尋落斯の如し以て其一班を知るべし
野史氏曰人苟も小俸に就く則ち小成に安んじて敢て又學業を修むる
の奮發心なきは世の常なり獨り君は中なる斷然職を辭し身は再び青
天白日の一書生となつて大に學術を練磨し遂に今日學壇の高位を占
むるに至る嗟亦先見なる哉

醫學博士池田謙齋君小傳

身には絹布を纏ひ潤袖を附け長衣を着徐々然として婦女子の狀を装
ひ嘗て醫術の繁劇の務あるとを知らず彼の戰場鮮血地に塗り腥風衣

を襲ふの時に臨で一朝此輩をして軍陣繃帶治療等の業を執らしめん
か決して勇敢活潑の術を施すと能はざるべし君は東京の人舊越後長
岡藩士なり天保十二年十月廿日越後南蒲原郡西の村に生る幼より慧
智あり能く物を判す長むるに及で遂に醫學に志を寄そ弱冠の頃ひ始
て江戸に遊び醫學を修む當時醫を以て名ある石見の人池田玄仲其才
を愛し立てゝ其養子と爲そ君本姓は入澤氏此に於て池田と稱そ
明治元年九月兵部省病院醫師試補申付らる十一月病院醫師に任せら
る同二年三月醫學校二等醫師に任せらる五月病院當直醫師仰付らる
七月大學大助教に任せらる十月從七位に叙せらる同三年四月少典醫
に兼任と六月正七位に叙せらる十月獨逸國へ留學仰付らる同九年五
月歸朝と同年五月陸軍々醫監に任せらる六月宮内省御用掛兼務仰
付らる同月文部省四等出仕に兼補す同月從五位に叙せらる同九年十
月三等侍醫に兼任と同十年一月文部省御用掛兼勤仰付らる同月東京

醫學校長の任を囑せらる四月東京大學醫學部總理の任を囑せらる十月二等侍醫に兼任同十一年一月勳四等に叙せらる七月内務省御用掛仰付らる十二月一等侍醫に兼任同十二年七月中央衛生會議委員仰付らる十二月正五位に叙せらる同十四年七月東京大學總理心得仰付らる同十五年十一月勳三等に叙し旭日中綬章を賜ふ同十八年一等侍醫に任せらる同十九年侍醫局長官に任じ勅任官二等に叙せらる同廿年從四位に叙せらる同廿一年五月醫學博士の學位を授けらる是より先き君戊辰の役官軍に従て大に傷卒治療に従事し其施術に因て平癒の功を奏する者數を知らず軍平で後ち兵部省醫師に擧げられ爾來抗据匪勉職務に盡す所あり明治四年官選に依て獨逸に留學し全國專門醫學校に入て醫術を研究し居ると凡そ六ヶ年業終へ學成りて歸朝するに及で陸軍々醫監に榮任せらる其後西南の役起るに當り君又命を受て戰地に出張し爾來晝となく夜となく幾百千の負傷兵を治

療して大に外科術の新技を施し以て衆醫の耳目を驚かせしと云ふ君人と爲り豁達にして果斷あり最も外科術に長せり故に其軍陣治療法に於ては尤も其妙を得局破割割手に隨て刀を運らし萬癒の術立るに成ると云ふ

野史氏曰凡そ醫たる者徒らに學術上の點に達するのみならず亦宜しく果斷力なくんばある可からざるあり今人あり頭を破り脈を絶ち鮮血淋漓として迸出するに臨んで寸分一秒も躊躇を可らざるなり彼の藪醫者流の傷を見て面色を變じ針を取て逡巡するが如きに至ては寧ろ醫なきに如かざるものあり況んや戰場に於てをや

工學博士古市公威君小傳

前宰相大久保利通の要路にあるや嘗て論せるとあり曰く皇國の政令をして治く天下に行れしめんと欲せば須らく先づ工業を擴張をべし

と豈夫れ識者の言と謂はざるべけんや

君は兵庫縣の人舊姫路藩士あり安政元年七月十二日江戸蠣殻町に生る父の名を孝と呼ぶ謹直を以て聞ゆ早逝を君初の名は兵庫郎と謂ひ後ち又造次と改む弱冠の頃ハ藩の勸學生となりて英學を修め後今の辻文部次官に就て學び明治の二年に開成學校に入りて佛學を修め翌年更に貢進生となりて大學南校に入學して普通學科を學び八年七月諸藝學修業の爲め佛國留學を命せられて渡航し九月「エコール、モンジュ」に入學して「エコール、サントラル」の豫備科を修業し翌年七月「エコール、サントラル」へ入學しく十二年八月「コンジュニウル、アール、エ、マニファクチュール」の學位を受け十一月更に巴里理科大學に入校し翌年七月「リサンシエ、エス、シヤンス」の學位を受けて歸朝したり

明治十三年十二月内務省雇申付られ月給百廿圓給與せらる同十四年六月更に全省准奏任御用掛仰付られ土木局勤務仰付らる十月文部省

准奏任御用掛兼勤仰付られ大學理學部講師の任を賜せられ年俸金三百圓を下賜せらる同十五年一月月給金百七十圓下賜せらる同十六年二月月給金二百圓下賜せらる同十七年三月六縣下土木工事監督仰付らる七月内務三等技師に任せられ二級月俸下賜せらる九月從六位に叙せらる同十九年五月工科大学教授兼工科大学長に任せられ奏任官二等に叙し上級俸下賜せらる全月帝國大學評議官を命せられ内務二等技師に兼任し土木局勤務を命せらる七月正六位に叙せらる同廿年三月内務省より年俸三百圓下賜せらる四月市街清潔規則審議の爲め中央衛生會臨時委員を命せらる全月第三區土木監督署へ出張を命せらる七月第四五六區土木監督署へ出張を命せらる同廿一年五月工學博士の學位を授けらる同月中央衛生會臨時委員を命せらる又就職以來各府縣下へ出張を命せらる十三回にして三十一縣二地方へ出張せり

せり
古市公威君小傳
終

君人と爲り豁達にして才敏なり夙に本邦工學の振はざるを慨嘆し十餘年の勉學と忍耐とを以て遂に學業の大成を告げ之を今日國家急需の實業上に施すに至れり宜なる哉東走西馳南徃北歸日も亦足らざる所謂一哺に三たび起ち髪を握て賓に接すとは抑亦君の謂ひなり野史氏曰歐米諸邦今日の文明を致せし所以のもの其源一にして足らざる雖ども要するに一の理學的ニは工學的の進歩に外ならざるべし就中工學は社會と密接の關係を有するものにして工學の進退は國家の盛衰に關すと謂も敢て不可あかるべきなり吾輩は青年子弟の奮て此學に志すもの多からんとを切望して止まざるあり

文學博士外山正一君小傳

君は舊幕士あり嘉永元年九月廿七日を以て江戸小石川柳町に生る幼より穎悟學を好み嶄然群兒と異れり其父母も亦心を盡して之を教訓

と長せらるに及で益々學に志し手に卷を捐て老十二歳の頃ひ始て蕃書調所に入りて英學を講じ文久三年既に開成所教授方に擧げられ慶應元年舊幕の命を以て英國に留學し倫敦大學豫備校に入りて普通學を修む明治三年十月更に辨務書記に任じて米國に派遣せらる尋で外務權大録に任せらる此時に當つて君官職の任を負ひ専ら學業に一身を委ぬると能はざるを以て上書して職を辭し時に五年二月なり爾來米國「ミシガン州」アン「アー」ポール高等中學に入りて凡そ一ケ年半普通學を修め翌年九月「ミシガン」大學に入學して凡そ三ケ年間哲學、理學を學び九年五月業成り歸朝したり是れ實に本邦人海外に留學を命せられたる者の嚆矢とす

明治九年五月東京開成學校五等教授の任を囑せられ月給金百卅圓給與せらる十月四等教授に進み月給金百五十圓給與せらる同十年四月東京大學文學部教授の任を囑せらる同十二年十二月月給金二百圓給

與せらる同十四年七月東京大學教授兼文學部編輯事務委員に任せられ年俸金二千四百圓下賜せらる八月諮詢總會々員に選出せらる九月正六位に叙せらる十月法理二學部兼勤仰付らる同十七年三月學藝部編輯事務委員を命せらる同十八年五月文部省編輯局兼勤仰付らる七月英文讀本編纂主幹仰付らる同十九年一月東京大學總理事務取扱仰付らる三月帝國大學評議官を命せらる四月奏任官一等に叙し上級俸下賜せらる七月米國「ミシガン」大學より「マストル、オウ、アルツ」の學位を受領し十一月第一高等中學教務商議委員を命せらる同廿年三月學士會員に撰舉せらる同廿一年五月文學博士の學位を授けらる七月東京音樂學校商議委員を命せらる又翻譯書著述の文章等若干あり大に世に傳播せり
始め君の洋行するや泰西の事情未だ明かならざ加ふるに往々奇恢の流言あり故に人々狐疑兩端を持するの秋あり然るに斷然桑梓を棄て

、鵬程萬里の波濤を渡り以て一知己一面識なき異人種に雜りて其學業を研究せんと欲するが如きは蓋し當時の人情爲し難き所あり獨り君は確然之を敢行して以て其少壯氣概を見る可きあり

君爲人沈毅寡言にして議論卓越其文章は井然として條理あり宜なる哉先年「ミシガン」大學より更に與ふるに文學博士の稱號を以て是に由て之を觀れば君の學藝の遠く海外に聞へて遂に該大學の認むる所となりたるは君の一大名譽と謂はざるべからむ

野史氏曰君天敏の才を以て既に教授の任に在ると此に十餘年循々として尙一日の如し帝國大學の旺盛今日の如きを致せし所以のものは實に君等の功多きに居るなり
○同十七年九月東京大學編輯事務委員に任ぜられ

法學博士菊池武夫君小傳

君は岩手縣の人舊南部藩士なり父の名は仙助後ち長閑と改む南部侯

に仕へて目付役町奉行又用人役を勤めり君嘉永七年七月廿八日を以て陸中盛岡に生る七歳にして讀書を始め十一歳の頃藩儒江幡五郎氏の門に入つて漢籍を修む氏は慨世家にして吉田松蔭日下玄瑞等と相交れり是れより先き藩侯學校を設けて修文所と稱し大に闔藩の子弟を教育せしむ君因て此に入學し切瑳琢磨幾くもなくして業大に進み保育生に拔擢せらる時に君年僅に十二あり常に好で歴史を讀み尤も古今の沿革に目を注ぎ徒らに字句に拘泥せざ又詩を善し屢其賞を受け亦最も江幡氏に愛重せらる戊辰の役起るに及んで江幡氏は奥羽列藩の牛耳を執り其門生四方に遊説を是に於て文教忽ち廢然亦一人の學を事とせるものなし君乃筴を收めて家に歸る

此時に當つて藩中大に洋風練兵を講じ其子弟をして之を習はしめ別て二隊となし一は十五歳以上の士族子弟より成り一は其以下の子弟より成る世人之を名けて豆隊小豆隊と稱せり君亦其小豆隊中の一人

なり既にして父仙助目付役とあり始め相馬に隊伍を率ひて出張し後ち退て秋田の境を固む金澤城陥ると聞き將に隊伍を整へて東せんとするや流言あり曰く秋田の軍勢襲撃して南部兵を塵殺すと君之を聞き憤然大に爲そ所あらんとする際事の誤聞に出たるを以て止めたりと其少壯義に勇み難を恐れざる概ね此類なり

明治二年君歳十五慨然感ぜる所あり上京以て學術を修めんと欲し之を父に請ふ許され後ち再び之を請ふ乃ち許さる然れども一錢の資を給するなし君辛うじて上京を當時麻布南部藩邸にある目付役谷某之を慰み以て南部家英麿君の近侍とあそ居ると一年未だ身を學業に委ると能はざ遇ま英麿君亦歸國を依て隨ひ歸る爾來郷里に在て大に學業を修め後ち再び其兄利敬君の近侍となりて修文所に學び其翌三年遂に官費上京を命せられて出京し伊藤庄之助に就て英學を學び尋で大學南校に入り又開成學校と變るるに迄て専ら法律學を修む八

年七月拔擢せられて米國留學を命せられて之に航し十月「ポストン」府「ポストン」大學に入學し凡そ一ヶ年半にして全科卒業法律得業士の稱號を受け爾後尙同大學に在て憲法議院法を研究し既にして同府裁判所に入り重に訴訟實地及代言事務等を講習し十三年七月米國を去り英佛を経て十月歸朝と

明治十三年十一月司法省雇申付られ月俸金百圓を給與せらる同十四年二月代言人試験委員仰付らる十二月東京大學兼務を命じ法學部講師の任を囑せらる同十五年三月代言人試験委員仰付らる十一月諮詢部會々員に撰擧せらる同十七年九月司法少書記官に任せらる同月大學法學部學生教導を囑托せらる十月從六位に叙せらる同月訴訟規則取調委員仰付らる同十八年七月判事登用試験委員仰付らる同十九年三月司法大臣秘書官に任せらる四月奏任官二等に叙せらる同月判事會同理事員を命せらる同月民法草案編纂委員仰付らる七月正六位に

叙せらる八月判事登用試験委員仰付らる同廿年三月檢察官會同理事員を命せらる八月司法大臣北海道及奥羽巡視に付隨行仰付らる十一月司法省文官普通試験委員を命せらる同廿一年五月法學博士の學位を授けらる

君人を爲り温厚にして才敏あり辨舌明確一言にして人能く之を了そ又常に人に語て曰く法律は元ど實地應用の學なるに學者往々空理に失して之が適用如何を顧みざる者あり豈亦戻らせやと以て其持論の一斑を知るに足るべし

野史氏曰法律の法律たる所以のものは之を實際に適用するにあり故に苟も實際に適せざるの法律は法律にして法律に非ざるなり是を以て時務を知るの法學家は徒らに空理に流れて虛法を講せせ席論を止めて實事に徴し勉めて其實法に就かんとを欲するなり

理學博士長井長義君小傳

君の東京の人なり弘化二年六月廿日江戸に生る資性敏捷少より學を好む齟齬の頃既に四書に通じ弱冠始て蘭書を講じ明治二年擧げられて大學南校句讀師となり明年更に大學少察長心得に進む幾許くもなくして官君を抜んで、獨逸留學を命じ是に於て君躍然命を受けて之に航し四年一月伯林醫學校に入て製藥學を修め後又伯林大學に入る十四年十二月全大學に於て遂に理學博士に撰擧せられたり此時に當て我政府柴田某を派遣して製藥機械を購求せしむ君亦命を受けて之と謀り遂に悉く其機械を整へ十六年五月に至て歸朝と

明治十七年六月衛生局雇申付られ月俸百圓を給與せらる六月東京大學教授に任じ年俸千二百圓下賜せらる同月理醫二學部勤務仰付らる七月諮詢總會々員に撰擧せらる同月内務省御用掛仰付られ年俸千二百圓を賜ひ衛生局勤務を命せらる同月東京試験所長兼務仰付らる十

月正六位に叙せらる十二月衛生局大坂試験所へ出張を命せらる同十八年十二月非職を命せらる同廿一年五月理學博士の學位を授けらる十月農商務二等技師に任じ奏任官二等に叙し上級俸下賜せらる是れより先き君東京製藥會社に聘せられ日夜其事務を執れり

曩に君獨逸國に在ると十余年以て製藥學の蘊奧を極め今日國家の急需に應じ豈亦偉ならんや夫れ古への醫は製藥なり調劑なり苟も其醫業に係るものは悉く執て之を兼ねたるも人智漸く進みて遂に今日に至つては製藥家と醫家とは全く分離して各専門技術とあり終に方今醫は製藥家を待て始て其技術の用を施すに至れり蓋し本邦製藥家を

出その君を以て始めとなす
野史氏曰製藥家は其理を講じ醫家は其術を盡す兩者相待て始て其功を奏すべきなり

醫學博士橋本綱常君小傳

君は石川縣の人舊越前藩士なり弘化二年六月二十日福井城下に生る天才秀拔少より醫學に志し齠齒の頃ハ既に漢書素讀に通じ歳較長じて藩立學校に學び弱冠の頃ハ江戸に遊び諸名醫に就て醫術を講じ傍ら蘭書を讀む此時に當つて蘭學を修むる者は實に寥寥指を屈するに足らざる其遇ま之れある世人忽ち之を擯斥して共に齒せざるに至れり然れども獨り君は大志を抱き誓て此小節を心頭に懸けまして益々其講習に怠たらざりしと云ふ既にして戊辰の役起るに際し君又大に官軍の負傷兵を治療し軍平で賞典若干を受く

明治三年十月軍事病院醫官仰付られ月俸六十圓下賜せらる同四年四月月俸七十圓下賜せらる十月軍醫寮七等出仕仰付らる同五年五月出仕を免じて獨逸國留學を命せらる同十年六月歸朝七月陸軍々醫官に任せらる同月本病院出仕仰付らる七月大阪表へ出張仰付らる同月長

崎へ出張仰付らる八月征討軍團附仰付らる同十一年一月勳四等に叙し金六百五十圓下賜せらる二月文部省御用掛兼勤仰付らる九月中部檢閱使隨行仰付らる同十二年一月東京大學醫學部教授を囑托せられ年金六百圓下賜せらる八月脚氣病院委員仰付らる同月脚氣病審査委員仰付らる九月中部檢閱監軍部長屬員仰付らる十月本病院御用掛仰付らる十二月從五位に叙せらる同十四年七月東京大學教授に兼任せらる同十七年二月歐洲へ出張を命せらる同十八年陸軍々醫總監に任せらる尋で勳三等に叙し旭日中綬章を賜ふ同年正五位に叙せらる同廿年從四位に叙せらる同廿一年五月醫學博士の學位を授けらる尋で歐洲より歸朝せ

是より先き君獨逸に留學せると五年大に内外醫術を究めて歸朝せりや直ちに陸軍々醫監に擧げられ續いて西南の役征討軍團附とあつて長崎に出張し其地臨時病院に在ると數閱月其間晝とあく夜とあく官

軍數百の士官并に下士卒の負傷者治療に従事し未だ曾て一夕だも安眠に就く能はざりしと云ふ軍平で後勳四等に叙し金若干を賜ふ十七年再び歐洲に留學するに當り大に醫術の蘊奥を極めて歸朝と今身は榮擢せられて陸軍々醫總監の顯位に在るも亦宜なり

君又醫學に於ては達せざるものなく就中最も外科術に其妙を得故に君の一たび療刀を奮ふに當つては病者其痛を感せるとちく剗破割解手に從て刀を運らし迅速神の如し是れ蓋し天性なり又君の實兄橋本左内氏の嘗て勤王家の主唱者にして遂に王事に斃れたり今其獄中の作に曰白髮蒼顏萬死餘平生豪氣未全除寶刀難染洋夷血却想南陽舊草蘆と以て其豪挾磊落の氣概を知るに足るべし

野史氏曰洋學年表を案するに本邦文明の種を播きしものは實に醫學にありと今より數十年前に當て蘭法醫術の始て本邦に行はれてより以來蘭學を修むる者必き醫に非ざるはなし斯くの如くにして漸次泰西の文明を輸入し遂に今日の隆盛を來せし所以あり

工學博士志田林三郎君小傳

君は佐賀縣の人なり安政二年十二月廿五日肥前國小城郡別府に生る父の名は紋太郎家世々農を以て業とす君幼より秀才あり群兒と馳驅の遊をなを好まを常に一室に籠りて書を読み字を習ふを以て樂とし時に或は工藝美術品に觸るゝとあれば終日心を凝して之を考判せり其父も又遂に農業の強ゆべからざるを知りて之に放任せりと云ふ君長るに及で益々學藝を嗜み明治の初年奮然笈を負ふて上京し石丸塾に入て之が學僕とありて螢雪碎身業大に進む

明治五年十月工學寮に入て電信學を修業し翌年八月工學專門官費生となり八年四月英學三等賞理學一等賞數學一等賞圖學二等賞を得更に大學教頭より合點一等褒賞を受け其翌年四月再び高等數學一等賞

并電信學試驗場褒賞を得十年に電信學實地試験の爲め熊本函館二縣下に出張し十二年十一月遂に工部大學校卒業大試験に及第して工學士の學位を受け十三年一月官選に依て英國へ官費留學を命せられ五月英國「グラスゴー」大學に入り居ると凡そ一年半同校に於て高等數學二等賞理學一等賞高等理學一等賞を得後又同大學に於て理學小説を著述し其賞として黄金の賞牌を受け十六年四月に至て歸朝す

明治十六年四月工部省准奏任御用掛仰付られ月俸五十圓を賜ひ電信局勤務仰付らる八月工部權少技長兼工部大學教授に任じ五級月俸下賜せらる九月朝鮮國釜山へ出張を命せらる同月正七位に叙せらる同十七年六月四級俸下賜せらる同十八年十二月遞信權少技長に任せらる同十九年二月東京大學教授に兼任す三月遞信少技長兼工部大學教授に任じ五級月俸下賜せらる同月工科大學教頭心得を命せらる同月電信局第二部長及帝國大學評議官并臨時地方遞信事務取調委員を命

せらる四月本初子午線并計時法審査委員を命せらる五月遞信三等技師に任じ奏任官三等に叙し上級俸下賜せらる七月從六位に叙せらる同廿年三月工務局次長に任せらる五月評議官并に教頭心得を命せらる同月東京電信學校長に兼任す同廿一年五月工學博士の學位を授けらる又各縣下に出張を命せらるゝと五回八縣下とす

君天資銳敏の才を以て篤學孜々として倦まぬ故に我工部大學に在ては常に優等証を得るのみならず又英國に於ても之を得たり加之理學小説を著述して金牌の賞に與かりたり是れ蓋本邦人の外遊中著述を以て賞を得たる者の始とす

野史氏曰君元と寒郷の一農子のみ苦學黽勉遂に今日の名譽を得るに至れり青年其れ勉めざる可んや

以上は第一回到博士位を授けられたるものなり

文學博士末松謙澄君小傳

豊前國京都郡は景行天皇の古蹟にして周圍に山あり山秀で水流れて風景絶佳なり其地に村あり前田村と云ふ君實に此村に生る君の十世の祖末松加賀守宇都宮家に仕へて家老たり天正年間城井谷の城陥り宇都宮家滅ぶるに及び加賀守亦戦死と遺子是れより豊前に流落し遂に前田村に其住を占む

父の名は臥雲居士通稱は七右衛門郡務に従事し堤防浚渫等の治蹟頗る多く今尙郡民其澤を被る前田村の隣村を稗田村と云ふ有名なる詩人村上佛山の住とる所なり君十一歳にして之に入門して漢學を修む明治四年始めて東京に出で嘗て近藤塾に入りて英數の二學を修め既にして去る

明治六年官始めて師範學校を設立し以て教員たるべきの生徒を募集と君其募に應じ試験を経て甲科に上る在學明年に至り大に同志と學

校の改革を計る校長甚だ之を悦ばせ君及今の仙石典獄に退學を命ぜられより學に定所なく嘗て東京外國語學校に學び傍ら新聞記者となり遂に日報社に入る此時始て伊藤參議に會ふ後數日を経て君街頭に彷徨す偶々參議馬車にて通過と之を見て直に車を駐め載せて共に其麻布の邸に歸る閑話時を移し分るゝに臨み參議其書房より「ギボンの羅馬史」の論理學の二書を出し之に與へて謂て曰く此論理書の如きは予れ亦容易に之を解せし羅馬史予に二部を有と依て今共に之を君に送る君の成業期とべきありと君大に感激せる所あり爾來益々學業に奮勵せり

明治八年朝鮮雲陽艦の砲擊事件起るや政府黒田井上二公を使節として朝鮮に遣はせ此時君は伊藤參議の勸めに依り初めて官途太政官御用掛に就き使節に従て朝鮮に赴き歸朝の後工部權少丞に任せ幾許くもかく法制官に兼任と同じく十年西南の役起るに及び君は東京に在

りて官餘日々新聞の記事論説を擔當し大に賊徒の討滅せざるべからざるを論ぜ其年六月命を受けて戦地に赴き陸軍省七等出仕を兼ね山縣參軍の幕僚に加はり軍に従ふ同じく十一月亂平で歸京と歸れば即ち官既に君の素志を納れ將に君をして海外に遊ばしめんとせ君雀躍直に現官を辭し公使館書記生見習と爲りて倫敦に赴く在勤幾許くもなくして再び官を辭せ是より専ら學業に志を傾け遂に「ケムブリッジ」大學に入り三ヶ年にして優等の卒業を爲し「エルエルビー、ハッチェロー、オファーツ」の學位を受け後ち亦「マスター」に進む同じく十九年春内命を以て歸朝と是れより先き君の未だ歸朝せざるに官既に君を文部省參事官に任じ歸朝後内務省參事官に轉じ尋で縣治局長に昇進し奏任官一等に叙し從五位に叙せらる又高等文官試験委員に兼任し今年六月文學博士の學位を授けらる

始め君の「ケンブリッジ」大學にゐるに當り傍ら佛獨の二學をも研究し其

大學に在つては最も雄辨を以て著はる然れども平時甚だ多言せむ亦豪放ならず其一たび事に當れば議論風を生じ膽大斗の如し君の討論會に臨むや一場活動衆皆傾聴せりと云ふ

君は幼少より頗る鋭敏の質ありしとは疑を容れず其學塾に在るや概ね年尤も若くして級尤も高し嘗て人に謂て曰く予れ幼時他の異能ありし唯其村童輩と嬉遊するに當り或は之と争ぶが如きとあるも未だ曾て他人の助けを仰ぎしとなく且つ之を父母に訴ふる等のとは絶へて爲さむ此一事は常に長老の賞讃を受けたりと君又幼時學を勉めむ八歳にして初めて習字を隣郷の寺院に習ふ然れども習字は君の最も好まざる所故を以て習字堂に登ると極めて稀之其間常に村童を誘ひて林間原頭に戯遊し期せむして項羽を摸せり是を以て筆跡は君の最も拙き所ありと云ふ其著はる所の書は春萍詩存、日本文章論、英譯源氏物語、谷間姫百合支那古文學略史、希臘古代哲學一班等の著あり又近年一

時世上に喧傳せし義經再興起原書の如きは實に君の筆に係ると云ふ野史氏曰君天賦の才を以て中途知遇を得て奮勵し後遂に英國に航して此に學業の大成を告ぐ嗟人青雲の士に就て其名益々顯る亦其人と爲り磊落にして胸中潔白青竹を割りたるが如し宜ある哉身は登庸せられて要職にあり亦偶然に非ざるあり

法學博士岡村輝彦君小傳

船舶輻湊出入織るが如くにして常に紛雜の事件多く明斷碩學の判官を得るに非ずんば能く其間に立て事務を整理すると能はざるべし所謂明斷碩學の判官實に其人あり横濱始審裁判所長岡村博士是なり君は東京府の人舊鶴舞藩士あり安政二年十二月廿日遠州濱松に生る父を義昌と稱し明治初年に兵庫權令たり始め藩主故ありて濱松より鶴舞に轉るに及び一家之に従て共に鶴舞に來ると云ふ

君天性宏達穎悟少にして藩設學校に入りて漢英二學を修め明治三年始めて藩の貢進生となりて上京し大學南校に入りて普通學を修め續て開成學校に轉じて法律學を專修し九年六月法學修業の爲め英國留學を命せられ十月英國法學士兼倫敦ミッドルテンプル社員テ、デーセー、アトキンズに就きて法學を研究し十一月倫敦キングス、コーレージ大試験に及第して倫敦ミッドル、テンプルへ入社し十三年一月倫敦法學院に於て試験に及第して英國狀師の免狀を受領し二月上等裁判所クイーンズベench部の代議員に列せらるるを許され爾來商法及び海運法を專修し重に海運裁判所にありて實驗を究む十四年二月學業全く卒りしを以て未だ留學満期に至らざるも官命を受けて歸朝したり明治十四年六月司法省に雇はれ月給金百圓を支給せられ民事局詰とある十月判事に任じ東京控訴院詰を命せらるる同十五年二月正七位に叙せらるる同十六年一月大審院詰を命せられ三月刑事局詰を命せらるる

十月訴訟法規則取調委員仰付らるる同十八年一月代言人試験委員を命せらるる二月從六位に叙せらるる七月判事登用試験委員を命せらるる八月横濱始審裁判所長を命せらるる同十九年五月奏任官二等に叙せらるる七月正六位に叙せらるる同廿年三月始審裁判所手續調査委員を命せらるる十月高等文官試験委員仰付らるる同廿一年六月法學博士の學位を授けらるる

是より先き君の未だ横濱に赴任せざるに當り長谷川判事所長となりて大に從來の弊習を一洗し事務着々として觀るべきものありしも一朝氏の洋行せらるるに際し一時港民の不幸を來せしも君が後任を繼ぐに及んで益々港民の便益を圖り繁を省きて簡に就き忽ち人民の欽仰を來すに至れり且つ代言人待遇上に著るしき改正を加へて彼の判事と懸隔楚越の如くなるの弊習を除去し勉めて事務の澁滯勿らしむ之れ蓋し英國の制に基くと云ふ

君人ど爲り温厚にして苟も事に臨めば敢て躊躇せるとなく常に果斷英裁を以てそ又品行端正にして曾て世人の容喙を招きしとなし平居人に語て曰く凡そ法官たるものは心を晴天白日の清きに置き寸分一刻だも法理の精神を忘却そ可からざると以て其持論の一斑を知るべし野史氏曰人苟も公平無私の心を以て事に處せば其結果亦必き公平あるべし之に反して苟も偏私の眼を以て訟を聽かば甚しき不公平の結果を生せんのみ嗟世の法官たるものは心を此に用いせんばある可からざるあり

理學博士寺尾壽君小傳

君は舊福岡藩士なり安政二年九月廿五日筑前國那珂郡春吉村に生る父の名は喜平太頗る才藝あり早卒を君幼にして異才あり嗜戯常に字を畫き文を誦そ其強記成人と雖ども亦能く及ぶあし嘗て其隣親某の

り一日戯に百人一首を示し之に約して曰く今より數日の後汝能く之を記するや否君直に諾して去る期に至て果して背誦流るゝが如し長老るに及んで益々博覽強記十五歳の頃ひ既に左國史漢に通き藩立脩獻館の先進生たり明治四年笈を負ふて上京し六年を以て東京外國語學校に入りて佛語學を脩め後ち開成學校と變じて物理學を專修し十一年大學理學部を卒業し拔で、官費留學生を命せられて佛國へ航し同國「モンヌウエイ」の天文臺に入つて數學及星學を研究し後又巴里大學に入て星學の實地を究め全國文部卿より「リサンシエド、エス、シヤ」ノス、マテマチックの學位を受け又金星經過觀察として同國政府より「マルチニック」島へ觀察の爲め委員を派遣するに際し君亦我政府に請ふて之に隨行し大に星學上の經驗を極めたり其巴里の大學に在るや天文學士心を盡して之を教導し以て大に望を囑せしと云ふ十六年三月米國を経て歸朝と

明治十六年三月文部省准奏任御用掛仰付られ年俸千二百圓下賜し理學部講師の任を囑せらる五月内務省准奏任御用掛兼勤仰付らる十月諮詢總會々員に撰擧せらる同月金環蝕觀測の爲宮城縣下へ出張を命ぜらる同十七年一月職務上の都合に依り文部省用地四番館に住居仰付らる六月東京大學教授に任じ年俸千五百圓下賜せらる七月正七位に叙せらる九月學藝志林編纂事務委員を命ぜらる同十八年六月英文讀本編纂委員仰付らる同十九年一月兼勤免せらる三月理科大學教授に任ぜらる同月本初子午線并計時法審査委員を命ぜらる四月奏任官三等に叙し下級俸下賜せらる七月從六位に叙せらる同廿年三月皆既日蝕觀測地點檢の爲め宮城白河近傍へ出張を命ぜらる八月皆既日蝕觀測の爲め下野那須郡へ出張を命ぜらる同月萬國量地學會加盟審議委員仰付らる九月中級俸下賜せらる同廿一年六月東京天文臺長を命ぜらる同月理學博士の學位を授けらる八月天文臺附屬官舎に移居せ

又中學師範教員學力試驗委員を命ぜらるゝと三回なりとぞ

是より先き君の開成學校に在るや學術優等にして大に教師の注目せしむる所とあり連りに等を踰えて進級せしむ竟に物理科の第一級に昇り亦常に其首座を占め未だ嘗て席を他に譲りしとなく又平居甚だ容貌を顧みず恒に弊衣を着て傍ら人無きが若し人遊歩に誘ふ者あれば則ち之を辭し只一室に籠めて數理の難問を解釋するを以て樂とし苟も其疑點の解し得べからざるものあれば夜を徹して之を考へ答を得ずんば決して寢に就きしとなしと云ふ君に弟三人あり第一は法律學士判事寺尾亨君次は醫學士澄川徳君其次は代言士小野隆太郎君にして皆穎敏の聞えあり君の著す所の書は算術教科書等若干卷あり大に世に行はる

君又天文學に熱心にして我が邦に天文の事業を興起せることを以て己が任とせ故に人之を評して天文癡狂となすに至る夫れ天文學は泰

西各國最高尙の學として之を修むる者は極て秀逸の人才に非んば之を學ぶもの亦しと云ふ今年夏海軍天文臺を文部省に屬せらるゝに當り君之が臺長となりて現に日々觀測に従事せり

野史氏曰東洋人の泰西人に及ばざる所以のものは其理學的志操に乏しきを以ての故のみ今ま試に吾青年子弟を指して之に數學志操を有する者を擧げしめば僅々指を屈するに過ぎざるべし嗟亦嘆まべきに非ざるや

醫學博士佐藤進君小傳

君は東京の人舊水戸藩人なり弘化二年十一月廿五日茨城縣久慈郡太田村に生る本姓は高和氏實家世々酒造を以て業とそ君少より穎敏讀書を好み嬉戯常に群兒と異なり長むるに及んで商業を營むを欲せむ其母亦之を強ゆ可からざるを覺り一日當時卜符を以て名ある祇園寺

の老僧に到り之を卜せしむ僧曰く學業に就く可なり後必其名を成るとあるべしと終に意を決して舊佐倉藩醫佐藤尙中に托するに君の一身を以てと時に君の齡十五歳あり爾來粉骨碎身日を以て夜に繼ぎ孜孜として怠らむ學業銳進忽にして衆弟の上に出づ始め尙中繼子なく穎敏の子弟を擧て其家を繼がしめんと欲し竊に徒弟の秀才ある者を試む是に於て君を拔で、養子となす時に齡廿三なり是れより専ら養父の薰陶を受く戊辰の役官軍奥羽に向ふ傷者頗る多し君總督宮の特命を奉じて奥羽に出張し白河及三春に病院を開きて晝夜治療に従事し尋で陸軍大病院頭取の命を蒙り軍平で歸京す賞賜若干あり此時に當て朝野擾亂の後を受け學藝未だ振はる殊に醫業の萎非尤も甚し君慨然本邦に在て醫術の蘊奥を極ると能はざるを嘆じ遂に意を決して明治二年六月を以て自費獨乙國に航し翌年伯林大學に入て醫學を修め全しく七年大試験を経て全校を卒業し優等証を得て醫學士の稱號

を領そ其後亦塙國維納府に至り汎く醫學の大家と交際し大に得る所あり偶ま父尙中大患に罹るの電報に接し倉皇歸朝を時に八年七月あり此年順天堂醫院の新築峻功を告ぐ君父を扶けて日夜内外科患者の治療に従事し傍ら生徒に教授を患者治を乞ふ者日に相踵ぎ門市を爲し終日尙診察を了せざるに至る又醫事雜誌を發行して大に新奇發明の治術を公にそ是に於て順天堂の名益々高く百里を遠しとせせしめて治を乞ふ者四方より群り至る

明治十年四月陸軍々醫監に任じ本病院出仕仰付らる同月大阪表へ出張を命せらる同月陸軍臨時病院長仰付らる五月從五位に叙せらる同十一年六月鹿兒島逆徒征討の際職務勉勵の賞として勳四等に叙し年金百三十五圓下賜せらるゝの恩典を受く同十二年九月西部檢閱監軍部長屬員仰付らる十月陸軍本病院長仰付らる同十三年九月東部檢閱監軍部長屬員仰付らる同十五年十月東京陸軍病院長免せらる同十七

年二月東京大學醫學部講師の任を囑せられ年俸千圓下賜せらる同十八年三月大學出仕に補せられ勅任に進めらる尋で大學醫學部第一及第二醫院長を命せられ又陸軍々醫本部御用掛を命せらる四月正五位に叙せらる六月勳三等に叙せられ旭日中綬章を賜ふ同十九年三月解職せらる同廿一年六月醫學博士の學位を授けらる是より先き西南の役起るや君官命を奉じて戦地に臨み日夜官軍の負傷者を治療し數月間未だ嘗て手に醫刀を捨てざりしと云ふ其間新奇の治術を行ひて屢々衆醫を驚けしと一にして足らぬ本邦外科醫術の面目を一新せしは實に此時に在りと謂ふも誣言に非ざる可し此年五月木戸孝允病篤し官君をして之を診せしむ君行在所に於て親しく天顔に咫尺し奉りて詳かに其病狀を具上し又西南の役負傷して大坂に在る者の狀情を奏上し且併せて曩に獨乙國に留學中普佛交戦の際に於ける負傷者の狀況をも奏聞に達し畢て酒肴を賜ふ

君學は内外に通じて修めざるものなし然れども最も外科術に長ぜるは世の洽く知る所にして剖割解破手に従て刀を運らし濟生の術立るに成る一昨年官職を解かれてより専ら力を順天堂と學生陶治とに用ひ其名殆んど天下に隠れなきに至れり

野史氏曰泰西各國多くは醫術を以て高尚の學とし容易に人をして之を修めしめずと是れ他亦し學資と忍耐と勉強と才智と經驗との五條件を備ふるを要すればなり人動もすれば醫學を以て賤業視し曾て其學の高尚あるとを知らざる者あり豈に思はざるの甚きに非ざるや

工學博士辰野金吾君小傳

君は佐賀縣の人舊唐津藩士なり安政三年八月廿二日肥前國東松浦郡唐津町に生る父の名は專右衛門後ち同族に養はれて養父宗安の長子たり家世々藩主小笠原家に仕て重役を勤む君幼にして異才あり嬉戯

常に木片を以て家形を模造し工みに之が装置を施そ人皆其技に驚けりと云ふ長ぜるに及で大に建築學に志そ十歳の頃ひ野邊英輔に就て漢籍を學び尋で官立學校に入り東太郎氏に就いて英學を修め明治五年を以て上京し六年十月工學入寮を許され續いて工部大學校に入學し十二年十一月を以て造家學を卒業して工學士の學位を受け更に十二年官選を以て英國に航し七年四月倫敦「キウビット」建築會社に入て實地を研究し九月轉じて「ダブリュー」ハルツスの「ビユービル」となつて造家學を修め居ると一年遂に全府大學に於て造家構造全科卒業の証を得たり爾來専ら實地に就て之を研究し後亦伊佛兩國を巡遊して十六年五月歸朝と

明治十六年六月工部省准奏任御用掛仰付られ月俸五十圓下賜營繕課勤務を命せらる同十七年七月工部權少技長に任じ五級月俸下賜せらる八月正七位に叙せらる十二月工部大學教授に任せらる同十八年六

月四級月俸下賜せらる同十九年一月本官を免せらる同月建築會社に聘せらる四月工科大学教授に任じ奏任官三等に叙し下級俸下賜せらる五月皇居御造營裝飾法顧問を囑せらる六月鐵道局新築計畫并に監督を命せらる七月從六位に叙せらる十二月横濱裁判所新築計畫を命せらる同廿年三月東京府工藝共進會審査官を命せらる九月帝國大學評議官を命せらる四月臨時建築局三等技師に兼任せ六月工學博士の學位を授けらる八月歐米行を許可せらる同月兼官に任せられ歐米巡廻の際議院及諸官衙建築事項取調を命せらる同月歐洲へ向け出發せり今回君の歐米諸州へ巡遊するや其目的とする所の殆く歐米諸州の建築構造を目撃して他日大に帝國建築事業に盡す所あらんが爲にして又其目下の急務とする所のものは日本銀行新築にありと云ふ野史氏曰歐米大列國と鼎立せんことを謀らんと欲せば須らく先づ其規

摸を宏壯にせざる可らば是れ造家學の今日に急務なる所以にして又其衛生便利の點に於ても欠く可らざるもの存に於てをや

文學博士中村正直君小傳

君は東京府の人舊幕士なり天保三年五月廿六日武藏國江戸に生る天資穎拔幼にして家庭の訓誨を受け長じて益々謹戒學を好む韶齒の頃ひ既に論孟を狭み好で水滸傳を讀む後ち井部塾に入り又桂川甫周に就て蘭書を學び齡十七にして昌平塾に入り侗庵一齋等の訓導を受けて錐股懸梁業大に進み遂に乙科及第拔擢せられて儒林に列することを得たり爾來安井息軒鹽谷岩陰藤森弘庵吉田松蔭等の先輩と交通し又巨儒佐久間象山を屢其旅亭に訪ひ爲に往々世人の耳目を來し殆んど危害に罹らんとせしと數回ありしと云ふ君幼名を訓太と呼び後ち正直と改め敬字と號と家素と微寒僅かに學

資を給せり其昌平蠻に在るや偶々米艦來て互市を求む是に於て攘夷鎖港の説海内に沸騰し甲論乙駁幕議區々志士扼腕起て洋館を焼く高杉の如きあゝ抗論辨駁吉田武田の如きあゝ皆不幸にじて或は鋒鏑に罹り或は囹圄に斃る就中先見佐久間象山の如きも遂に刺殺せらるゝ所となれり君竊りに思へらく方今の世に處するもの宜しく歐米に航して識見を博し以て彼是折衷とるところなくんばあるべからざるありと遂に斷然儒冠を脱して洋服に換へ慶應二年を以て英京龍動に遊び居ると二年大に得る所ありて歸朝せり

是より先き君昌平蠻を出でゝより甲州徽典館の學頭に聘せられて盛に學徒を誘導し館内靡然として其下風を慕ふ後再び擧げられて昌平蠻教授となれり明治二年倫敦より歸朝するに迨んで小石川に同人社を開いて大に學生を薰陶し家塾常に滿員を告ぐ是時に當つて都南三田に慶應義塾あり都北礫川に同人社ありて互に相伯仲し都下の二大

336857

塾と稱せらる現に其門下より出でゝ朝野の要務に在るもの多し

明治八年十一月東京女子師範學校攝理を囑せらる同十年八月東京大學文學科教授を囑せらる同十三年五月攝理を辭し同十四年八月東京大學教授に任せられ年俸金五百圓下賜し文學部勤務仰付らる九月從五位に叙せらる同十六年三月年俸千二百圓下賜せらる同十七年九月更に東京大學勅任教授に進められ年俸金千八百圓下賜せらる全月正五位に叙せらる同十九年三月元老院議官に任せらる十月從四位に叙せらる同廿一年五月文學博士の學位を授けらる

君文章に於ては東坡の一瀉千里退之の浩洋簡嚴なるを嗜み又廬陵歐九の情至浩氣を愛し亦震川の簡醇を喜び亦尤も餘姚の三不朽を具ふるを重じ一日三誦を怠らざ況んや其學は博く和漢洋に通じて修めざるものなく其著述の翻譯書又は文章等は堆積山を爲し就中西國立志篇の如きは洽く世上に其名を知らるゝに至れり

野史氏曰世の漢儒先生も亦多し矣然れども多くは偏固墨守主義にして移ることを知らず甞に移ることを知らざるのみならず徒に陳文漢を唱へて苟も之を實用に施すことを知らず獨り君は翻然として博渉主義を取り遂に進で之を政治界に活用し以て今日至高の榮爵を極むるに至る嗟亦偉ある哉

法學博士木下廣次君小傳

嘉永安政の頃ひに當て肥後熊本に碩儒號の韓村先生なるあり其名四隣に聞へ門下常に滿ち英才輩出せり即ち今の竹添公使の如きも亦先生の門人なりと云ふ

君は先生の一子にして嘉永四年正月廿五日を以て肥後熊本城下に生る少より家庭の教訓を受け長じて後ち藩立時習館の居寮生に擧げられ明治三年十一月藩の貢進生となりて大學南校に入り凡そ二ケ年間

佛語學を修め五年八月更に明法寮法學校に入學して同校舎長となり四ケ年間法學を研究し八年八月拔擢せられて佛國留學を命せられ十一月巴里大學に入つて凡そ四ケ年法學を修め全校を卒業して法學得業生の稱號を得十二年十一月更に法律學士の學位を受け尋で歸朝し明治十五年三月文部省准奏任御用掛を命せられ年俸千二百圓下賜し東京大學法學部講師の任を囑せらるる全月諮詢總會々員に撰擧せらる同十六年五月東京大學教授に任じ年俸千五百圓下賜せらる同月正七位に叙せらる同十七年二月學藝志林改良法方取調委員仰付らる十一月法律學士の稱號を授けらる同十九年三月法科大學教授に任せられ同月圖書館管理を命せらる四月奏任官三等に叙し中級俸下賜せらる同月從六位に叙せらる五月帝國大學評議官を命せらる同廿年十月高等文官試験委員仰付らる同廿一年四月上級俸下賜せらる六月法學博士の學位を授けらる十月第一高等中學教頭に兼任す

君人ど爲り剛邁にして果斷あり議論確切動かそ可うらそ其始め入て法科大學教授の任に就くや主として學生の品行上に注目し又大に人才陶冶の點に心を傾け或る人之を評して曰く大學に人傑あり上に渡邊總長ありて之を統治し下に木下評議官ありて之を助く以て益々帝國大學の基礎をして鞏固ならしめたりと又頃る君第一高等中學教師の任に就くや痛く學生の品行を論し慷慨悲嘆次くに滿腔の熱血を以てそ一聽學生をして悚然反顧の念を生せしむ嗟君の如きは眞に教育を以て自ら任するものと謂ふべきあり

野史氏曰天下の奇才は天下の奇才に遇て始て其用を爲そ古へより氷炭相會て未だ功を奏せしとあらず香の薫るるの固より合種たればあり

理學博士松井直吉君小傳

君は岐阜縣の人舊大垣藩士なり本性は和田後ち松井と改む安政四年

六月廿五日美濃國安八郡大垣城下に生る資性英敏最も記憶力に富む六歳の頃以て藩立致道館に入て諸學童と俱に漢籍句讀を受く君一讀過にして音訓耳に入れバ從て之を記し復た之を忘れそ其間常に庭林に出で、遊戯を試み業終て共に家に歸る人以て奇童と稱せしと云ふ明治四年藩の貢進生とありて大學南校に入り後ち開成學校と爲て化學を專修と八年七月官君を拔で、米國留學を命ぜ因て之に航し九月紐育「コロンピヤ」大學に入て化學科を修め凡そ三ヶ年にして卒業理學得業士の稱號を受け後ち更に全校の研究生とありて其蘊奥を極め十三年七月遂に理學博士の學位を受け尋て歸朝と

明治十三年十月大學理學部講師の任を囑せられ月俸百圓下賜せらる同十四年八月諮詢總會々員に撰舉せらる九月東京大學教授に任し年俸千八百圓下賜せらる十月豫備門兼勤仰付らる十一月從六位に叙せらる同十五年十月理學部一年學科課程改正調査委員を命せらる同十

六年十二月大學圖書課監督を命せらる同十七年七月年俸二千圓下賜せらる同十八年六月英文讀本編纂委員仰付らる同十九年三月工科大學教授に任せらる四月奏任官二等に叙し下級俸下賜せらる七月正六位に叙せらる同廿年四月第三高等中學教諭兼教頭に任せらる同月奏任官二等に叙し上級俸下賜せらる同廿一年六月第三高等中學商議委員を命せらる同月理學博士の學位を授けらる

君天敏の才を以て學術の蘊奥を極む何の到らざる處あらんや一昨年官君を拔で、第三高等中學教頭の重任に當らしむ爾來薰陶其宜を得て大に秀逸の人才を此より輩出と可きは更に疑を容れざる所なり野史氏曰少年の才子長じて未だ必せしも甚だ奇ならざるものあり蓋

し君の如きは所謂少聰大奇兩全の偉男子と謂ふべきのみ
の事書き傳へたる事少し
傳へし事
醫學博士田口和美君小傳

君字は士行節堂と號と父の名は順菴母は山士家氏家世々醫を以て業と君天保十年十月十五日を以て武州北埼玉郡小之袋村の藤島郷に生る幼にして機敏年甫て十五江戸に遊び佐藤一齋鹽谷岩隱諸儒に従ひ専ら漢學を修め居ること五年慕醫林洞海の門に入て蘭書を學び兼て醫術を傳習し後ち又赤澤寬堂に就て専ら歐醫治療を學び刻苦匪勉業大に進む以爲らく多年學ぶ所蓋し紙上の論のみ若かき之を實地に驗せんにはと因て自ら計る所あらんとを偶ま古河城主土井侯に聘せらるれども就かき文久二年籠を收めて下野安蘇郡佐野に卜居し始て

醫學を開く治を乞ふ者日々相踵き名聲漸く遠近に傳ふ王政復古萬機爰に新なり有爲の士争て東京に膺集し各々爲る所あらんと君慨然として思へらく志士豈碌々として鄙郷に安居するの秋ならんやと遂に意を決して之を父に請ひ托するに其妻子を以てし明治二年正月單身上京大學東校及病院に入り英人「ウヰリ」に就て化

學、解剖、生理の諸科を研究し日以て夜に繼ぎ孜々として倦まぬ業忽ちにして進む

明治三年一月大學少句讀師申付らるる八月中授讀生申付らるる十二月大學出仕仰付らるる同四年五月大學少得業生に任せらるる八月文部權少助教に任せらるる八月十三等出仕仰付らるる十月十二等に進む同五年一月解剖科專務を命せらるる三月十一等出仕に進む同六年二月十等出仕に進み十二月八等出仕に進む同七年十二月二等教諭に任し月俸七拾圓下賜せらるる同八年二月備申付らるる同九年六月五等教授に任し月俸百圓下賜せらるる十月月俸百廿圓下賜せらるる同十年十二月賞與金百圓を賜ふ同十二年一月月俸百四拾圓下賜せらるる同十四年七月東京大學教授に任し年俸千八百圓下賜せらるる九月從六位に叙せらるる十二月年俸二千百圓下賜せらるる同十七年十月年俸二千四百圓下賜せらるる同月正六位に叙せらるる同十九年三月醫科大學教授に任し奏任官二等に叙せ

らるる同廿年四月下級俸下賜せらるる五月自費洋行を許可せられ且つ歐州留學中年俸三分の一を給與せらるる同月解剖學標本蒐集貯藏方法取調を命せらるる全廿一年五月醫學博士の學位を授けらるる又目下獨乙伯林に在て醫術の奧理を研究せり

是より先き君醫學諸科を修むるに當り其最も意を盡せしものは實に解剖學に在りとす然れども君始め資性仁柔屍体を弄し肉を高し筋を解く等のは甚喜ばざるところ是に於て自ら奮起し勉めて剖割を以て事とし或は深夜骨ヶ原に往て白骨を拾ひ又は深林墓地に入て其膽を練り爾來又意に介するものあさに至れりと其嘗て大學に在るや或人の熟睡を窺て暗夜竊に教場に入り以て積屍の間に坐し又或は深更人靜まつて後竊に燭を取て之に臨み以て其筋骨、皮肉、臟腑の部位を精密に點檢し又は夜更け体氣共に疲れて往々屍を枕にして假寝するとあり又或るときは其屍体の冷氣に襲はれ遽然として夢覺れば燭盡

き燈滅し暗中手に觸るゝものは只觸體のみ此の如くにして經驗する
と數年大に自得する所あり遂に「ドクトル」「ミユルレル」并に「ドクトル」ホ
フマンの二氏に親炙して解剖學教場を主事し又獨乙學を專習せり爾
來夙に起き深更に寝ね寸分一刻だも未だ嘗て手に卷を捨て其妻亦
内に在て之を佐け良人をして家事の憂なうらしめしと云ふ
君又嘗て人体骨格を鉸鏈そ是を本邦人鉸鏈の始と博士「ミユルレル」大
に其術の精妙に感し醫書一部を寄贈す君復た命を奉して偶工松本喜
三郎を指揮し紙塑の人体を製造せしむ外部より内部に至る細大備具
毫も遺ることなし又川本洲樂を使役し象牙を以て骨格の鉸鏈を模造
せしむ此二体は曩に文部省より澳國維納府大博覽會に寄贈し大に聲
譽を博せり後ち獨逸の碩學「ルードルフ、ヒルショイ」氏君の解剖學に精
しく骨格鉸鏈等を製作するを聞き自著の「ツェラルパトロジー」并に小照
を寄贈して遠交を求む其の後ち君益々力を此に盡し更に組織胎生の

二學を研究し亦解剖書數十卷を著はせり是に於て君の名聲四方に傳
播し我解剖學者を稱するときは必き君を推すに至れり

君又人肝の護膜腫中より黴毒「バチルレン」を發見し之を世に公にせり
其生徒を教導する循々敢て倦まざ其職を醫學教務に奉じてより殆ん
と二十九年尙一日の如く老て益々壯なり昨年五月又自費を以て歐州
へ遊學し交を名醫に求て術を外國に試みんと請ふ許さる則ち獨乙に
航して目下學術並に實地研究に従事を頃る既に某二論を著はして碩
學の評を得ると云ふ

其著はそ所の書は解剖攬要十三卷、組織攬要三卷、顯微鏡術攬要一卷、黴
毒觸接論若干卷、黴毒傳染論若干冊、及組織學標本若干部ありて皆盛に
世に行はる

野史氏曰奮發忍耐力に強く人をして一讀三嘆止まざらしむるものは
君の傳に若くはなく又其志操の堅固にして百折不撓の志を有し讀者

をして思はせ快と稱せしむるもの、高木氏の傳に若くはあし況んや
君は醫學上の發明一にして足らせ之を碩學と謂はせして何ぞや

工學博士谷口直貞君小傳

君は大坂府の人、舊堺藩士なり、安政二年十一月十五日堺城下に生る、幼より機敏神童の稱あり、年稍長して藩校に學び、明治の初年上京して大學南校に入り、後ち開成學校と爲て工學を專修、九年六月官第二回の優等生を拔擢して海外に留學せしむるに際し、君其撰に當り英國留學の命を受けて之に航、十一月蘇國「グラスゴー」大學に入て工學を修め居ると凡二ヶ年にして全學科を卒業し、後ち「ケント」州「アックス」の器械工業會社に入て實地器械製造に従事し、十一年十一月「グラスゴー」大學の卒業大試験に及第して、「バチエロール、オフ、サイエンス」の學位を得、且つ終身該校の公議員たるの名譽を受け、再び全社に入て實地研究の業を執り

しが十二年一月に至て倫敦府工學會院の博士に撰舉せられ、續て又全國農學社の萬國農事展覽會の耕作器械類審査官補に擧げられ、爾來専ら工場實驗に全力を傾けしと云ふ、今其研究中の一二重要點を擧ぐれば、曰く其鑄造所に於ては大小異種の機關模型を製作し、或は之を鑄造し、又は其機關の實力を驗定すると、二に曰く其仕上所に於ては諸般の機關を組立つると等にして、其後又全社の依頼を受けて、白耳義「アントウエル」府へ赴き、其地の各工業を補佐し、此に留ると半年、其間君の實習せし事業は貯水場建築、蒸氣機關の設置、水道測量及び地中鉄管の裝置等にして、大に經驗得る所あり、十四年七月に至て、飯朝せり、君の歸朝せるや、東京職工學校教諭に擧げられ、月俸百二十圓を賜ひ、尋て從六位に叙せらる、十九年農商務三等技師に任じ、奏任官三等に叙し、上級俸を賜ひ、後又工科大學教授に兼任し、廿一年六月工學博士の學位を授けらる、又昨年以來紡績會社の依頼を受けて、歐米諸州を慢遊せしが、今年九月

に至て歸朝したり
野史氏曰自今將に器械製造業の旺盛を見るべきの時運に向へり則ち
日からせして君の一身は大に朝野に擧用せられて當に繁務寸暇なき
の榮位に至らんのみ

文學博士川田剛君小傳

君字は毅卿、鹽江と號と父の名は資嘉、字は士會と稱し母は瀬尾氏なり
君天保元年六月十三日を以て備中淺口郡赤崎に生る幼にして父母に
別れ伯舅瀬尾維徳の家に食はる維徳は醫師にして漢洋の學に通ず君
其教を受け稍長じて詩を中村池北に學び徂徠派の學を鳥越式部に受
け朱子學を鎌田宗平に受く

君弱冠の頃江戸に遊學し初め大橋訥庵に従て程朱陸王性理の書を
講習せしが既にして其大意を了し次に藤森天山に就て文章を學び後

又古賀茶溪に従て博く諸子百家の書を傳習そ是れより先き安井息軒、
藤森天山、鹽谷岩陰、芳野金陵等の諸老儒一大文會を設けて舊雨社と稱
そ君年尙少ふして之に列し最も安井息軒に愛重せらる天山没するに
及んで安井息軒に従ひ古學を講じ専ら考證學に心を傾けり
君業成るに及んで大溝侯賓師の禮を以て其藩に聘して學政を司らし
む始め松山侯其儒臣山田方谷をして君を招聘せしめ祿五十石を給し
て上士に列せんとを約そ大溝侯之を聞き更に百石を増給して上士の
頭に班せしめんとす君思へらく松山は生國にして祖先墳墓の地あり
且つ前約ありと遂に大溝を辭して松山に仕ふ大溝侯猶歲祿五人口を
贈りて其講義を聞けり松山侯の支封安中侯も主侯と相會ふて講筵に
臨み且江戸邸の學生を教督せしめ亦歲祿若干石を贈れり後ち松山侯
幕府の閣老とあるに及んで君をして督學とし且つ會計官を兼ねしむ
尋て監察に遷れり君此時大勢一變の近きにあらんとを察し侯を諫て

辭職せしむ直言激烈にして執政輩に忌れ遂に其策用られ居ると一
 兩年果して王政復古し伏水の敗に松山侯徳川内府と共に東に還り罪
 を天朝に獲て其封土を沒收せらる是に於て始めて其直諫を用いざり
 しを悔ゆと云ふ

此變の起るや君は江戸邸にあり之を聞き馳せて大坂に趣く到れば則
 ち大坂は既に落城せり因て藩老熊田恰と共に兵士を率ひて松山城に
 歸る途にして官兵に圍まれ藩老切腹し遺書して罪を官軍に謝し以て
 衆士の命を助けんとを乞ふ君監察を以て切腹の席に臨み且つ遺言の
 草案を修正を既にして官軍其謝罪を容れて圍を解き君を松山城に護
 送す此時に當て松山侯は江戸を去り會津より函館に奔れり君舊主の
 爲に哀を天朝に乞んと欲し形を變じて奴僕となり潜に京師に入り辨
 事秋月侯に上書して松山侯の反臣に非ざるを辨す又潜かに江戸に往
 き侯族政倉勝彌の或る寺に潜居せるを見て之を伴ひ主従形を變じて

道者となり無異に敵地を通過し山陰道より松山に還り之を立て、板
 倉氏の封を襲しめんとを上請す又人を遣り函館より前の松山侯を迎
 歸り其罪を謝り朝廷之を寛典に處し勝彌を松山に封し藩名を高梁と
 改む勝彌手書して厚く其功を稱し少參事に任じて秩録を加ふ君敢て
 當らず辭して深川に卜居し業を學徒に授く金澤鳥取兩侯世子及諸侯
 士大夫來り學ぶ者二百餘人聲名大に遠近に傳ふ
 明治三年一月大學少博士に任せらる三月大學御用掛仰付らる同四年
 八月權大外史に任せらる十一月記録編修御用掛仰付らる十二月正六
 位に叙せらる同五年八月願に依て本官を免じ位記返上仰付らる同六
 年六月文書局御用掛仰付らる同月國史編修を囑せられ手當として一
 ヶ月金二百圓下賜せらる十月全上金三百圓下賜せらる同七年七月歴
 史課御用掛仰付らる同八年八月一等修撰に任せらる十月正六位に叙
 せらる同十年一月修史局殘務取調仰付られ全月一等編修官に任せら

る三月從五位に叙せらる同十四年六月奥羽北海道御巡幸供奉仰付らる同月供奉中内閣大書記官心得仰付らる十二月宮内省四等出仕に補せらる全月文學御用掛仰付らる同十七年九月東京大學教授に兼任尋て本官并兼任を解かる同廿一年六月文學博士の學位を授けらる其著書は讀史閑話、讀經閑話、蓋簪社古文偶評、文海指針、隨讀隨鈔、客召紀程、藤森先生年譜等ありて未だ世に公にせざるものあり君人と爲り恭謙にして學識尤も高く其文章は雄健奔逸蘇東坡の風ありて亦別に一機軸を出せるものあり

野史氏曰滔々たる天下名利の爲に其身を屈せざるもの蓋し幾人か在る嗚呼君の如きは眞に高潔自ら守る者と謂つ可きなり
陽氣發する處金石亦徹る精神一到何事かならざらんや君は京都府の

法學博士富井政章君小傳
富井政章君小傳
富井政章君小傳

人舊北白川宮家臣なり安政五年九月十日京都武者小路通新町に生る父の名を正恒と稱し頗る通才あり君少にして聰了四歳字を讀る長そるに従ひ嶄然群類を出づ少時尤も人に異なる所のものは只人に後れを取らざることを常に心肝に銘せりと云ふ明治二年に小學校を卒へ全しく四年に中學校を卒業し同しく六年に府立佛學校を卒業し續て上京して東京外國語學校に入り佛語學を修めて第一等科に至る是より先き君學友某と共に司法省法學生徒の試験に應じ不幸にして落第せり是に於て慨然遂に洋行の志を決せり
明治十年五月自費を以て佛國へ航し里昂の人某に雇はれ其僅かに得る所の報金を以て學資に充て煩務の余暇大に學業を切嗟し粉骨碎身後遂に里昂大學に入りて法律學を修め十三年八月全校を卒業して法律學士の學位を受け尙法理の蘊奧を研究し十六年二月に至り更に法律博士の學位を受け尋て歸朝す

明治十六年十一月司法省雇申付られ月俸百三十圓給與せらる同十七年二月文部省准委任御用掛を命じ東京大學勤務仰付らる八月制度取調局御用掛兼勤仰付らる同十八年八月東京大學教授に任じ年俸千八百圓下賜せらる九月從六位に叙せらる同十九年三月法科大學教授に任せらる四月奏任官三等に叙じ上級俸下賜せらる同廿年十月高等文官試験委員仰付らる同廿一年六月法學博士の學位を授けらる
 始め君の法學生徒入學試験に應じて科に登らざるや大に悔悟奮勵爾後益々進で今日あるに至れど學友某嘗て或人に此事を語て曰く吾れ僥倖にして科に登り富井氏は不幸にして科に登らざ今反て高下所を異にそるに至れり若し氏にして其時に當て及第せば豈亦勇進激昂單身佛國に航するが如きとあらんやと是を以て之を觀れば人世一時の不幸は反て後の幸となり其始の幸は後の幸に如かざるものあり
 野史氏曰學に熱心なる者は賤業を爲るとを耻ぢ之を耻る者は眞正の

學士に非ざるなり嗟君の如きは嗟て益々進取の氣概を勃發し曾て小節を顧みず彼の一反び跌けば忽ち天を仰で大息し直に志を他に轉せざるが如きは固よと取るに足らざるなり

理學博士櫻井銳二君小傳

君は舊金澤藩の人なり通稱は銳五郎後ち銳二と改む安政五年八月十八日加賀國金澤城下に生る父の名は甚太郎馬術を以て藩侯に仕へ門弟凡そ百五十人あり文永三年病卒を子三人あり長を房吉今の理學士櫻井房記君と稱して十二歳次を清三今の理學士櫻井省三君と稱し八歳其次は即ち君にして僅かに三歳なり其父の卒する獨り母之を鞠育して以て亡父の勞に代りしと云ふ
 始め兄弟三人共に其遺志を繼で馬術を研究せしが一朝時勢の變遷に感老る所ありて之を廢し三人専ら學術に志を傾く君長老るに従ひ才

氣衆に秀づ明治二年郷師豊島某及び三木某等に就き漢籍を學び又藩設の致遠館に入て普通學を修め後ち又英人「ナスボン」并に今の三宅醫學博士に就て英學を修め四年五月上京して大學南校に入り六年開成學校と改稱せらるゝに當り化學を專修し九年六月學術優等且品行端正の賞狀を受け續て拔擢英國留學を命せられ十月倫敦「ユニバルシティ」コレージュへ入學し居ると八ヶ月にして化學優等生となり同校より金牌を受け十二年六月同校理化學二科競争試験に及第し「シロスウオルカ」學士の稱號を得且學士賞典録英金百磅を給せられ十四年九月期滿て歸朝す

明治十四年九月文部省准奏任御用掛仰付られ年俸千二百圓下賜し大學理學部講師の任を囑せらる同月諮詢總會々員に撰擧せらる十一月大學豫備門兼務仰付らる同十五年八月東京大學教授に任じ年俸千五百圓下賜せらる九月正七位に叙せらる同十七年四月教授講談の細則

取調委員を命せらる十月年俸千八百圓下賜せらる十一月從六位に叙せらる同十八年六月英文讀本編纂委員仰付らる同十九年三月理科大學教授に任せらる四月奏任官三等に叙し上級俸下賜せらる十月東京府に轉籍と同廿一年六月理學博士の學位を授けらる又中學師範教員學力驗定試験委員を命せらるゝと前後四回とぞ

君本邦大學に於て優等褒狀を受けしのみならず亦英國に於ても「シロスウオルカ」學士の稱號を得且つ學士賞典録の賞譽に與りたるは無上の名譽と謂つべく秀逸の士は天下到る所眞如の光を發たざるをきを見るべし

野史氏曰金澤藩は舊と堂々たる天下の大藩あり其地豈に秀逸の士に乏しからんや將に續々踵を繼ぐの青年子弟あらんとぞ況んや先進の士既に寡からざるをや

醫學博士小金井良精君小傳

君は新潟縣の人、舊長岡藩士なり。父の名は儀、牧野侯に仕へて子五人を生め、君は其次男にして、安政五年十二月十四日、越後國古志郡長岡今朝白村に生る。少より慧悟學を好む。六歳の頃、藩立學校に入て、漢籍を修む。時偶ま戊辰の役に際會し、絃誦の音は忽ち變じて、百雷一擊の砲聲と化し、書を賣て劍を買ふの時勢とあり。君慨然感する所あり。且家又貧、學資を給ると能はざるを以て、遂に志を決して上京せり。時に明治三年三月にして、歲僅に十二あり。然れども志は益々固く、某校の學僕となりて、刻苦奮勵、業大に進む。

明治三年十月、大學南校に入り居ると一ヶ年半にして、第一大學區醫學部に轉學し、爾後専ら醫學を研究せると。七ヶ年にして、東京大學醫學部を卒業して、醫學士の稱號を受く。時に十三年七月なり。十月更に解剖學並に組織學修業の爲め、三ヶ年間獨乙國へ留學を命せられて之に航し

十四年一月、柏林大學に入て、教頭「ウルグイル」に就て解剖及組織學を研究し、凡そ三ヶ年にして、全大學の官仕助手に擧げられ、後又自費を以て一ヶ年半尙其蘊奧を究め、十八年六月に至て歸朝す。

明治十八年七月、文部省准奏任御用掛、仰付られ、大學醫學部勤務。月俸百圓下賜せらる。同十九年三月、醫科大學教授に任じ、奏任官三等に叙し、下級俸下賜せらる。七月、從六位に叙せらる。同廿一年六月、醫學博士の學位を授けらる。同月、人類學取調の爲め、北海道へ出張を命せらる。是より先、獨乙に在るとき嘗て、網膜發生并に紅彩構造二書を著し、して之を世に公にせしと云ふ。

君人と爲り、温厚篤實、遂に學僕より起て、身を立るに至る。其難苦想ふ可きあり。彼の餘りあるの學資を有して、身は一業一事だも成ると能はざる者に比せり。其差、豈天壤のみならんや。

野史氏曰、富者後ち必しも富まざ、貧者後ち必しも貧しからざ。只學ぶ

と學ばざると勉むると勉めざるとにあり人夫れ慎まざる可んや

工學博士岩谷立太郎君小傳

君は滋賀縣の人舊水口藩士なり安政四年八月十五日近江國甲賀郡水口に生る幼少の頃ひ藩儒中村栗翁に就て漢籍を修め維新の際父に従ひて京都に出で神山四郎の門に入て又漢籍を學び明治三年十月始めて化學を專修し八年八月地質學教師「マンロー」に従て九州地方を巡廻して實地研究を爲し十年五月鑛山學修業の爲め拔擢せられて獨乙留學を命せられて之に航し十月全國「サクセン」州「フライベルク」府鑛山大學に入學して冶金學科を專修し居ること三年銀鉛冶金術上の論文を草し定規の試験を経て「ヒュッテンイオンジニール」ノ學位を受領し更に「フライベルク」府官行冶金所に至て實地研究に従事し爾來教授「ウァイス」

「ハハ」の新發明に係る所の鑛物「ウイックレリト」の化學成分を驗定し又純「コーボルト」製練上の研究をちして十四年八月歸朝と

明治十五年一月文部省の命を受け「ノセルロ」氏の採鑛學翻譯に従事と八月東京大學理學部講師の任を囑せられ月俸六十圓下賜せらるる十二月文部省准奏任御用掛仰付られ月俸百圓下賜し理、文、二學部勤務を命せらる同月諮詢總會々員に撰擧せらる同十八年三月學藝志林編輯事務員を命せらる四月東京大學教授に任し年俸千五百圓下賜せらる五月正七位に叙せらる六月英文讀本編纂委員仰付らる同十九年三月工科大學教授に任せらる四月奏任官三等に叙し下級俸下賜せらる五月農商務三等技師に兼任し鑛山局勤務仰付られ年俸四百圓下賜せらる七月從六位に叙せらる同廿年九月中級俸下賜せらる同廿一年六月工學博士の學位を授けらる又各縣下に出張を命せらるること三回七縣下にして中學、師範、教員學力試験委員となること四回とと

君人ど爲り静穩にして尤も記憶力に強く少時神童の稱を得たりと云ふ亦其父は有名なる書家岩谷一六先生なりとぞ
野史氏曰崑崙の山に入る全山美土ならざるはあしと何んぞ知ん庸眼之を見れば亦只碌々たる一塊石たらんのみ況んや數百千尋の地底に於て鑛脈を發見するに於をや豈之を研究せざる可んや地底に鑛積あり之を採らず山に鑛塊あつて之を治せずんば所謂寶の持腐に歸せんのみ一私人の持腐尙恕とべし一國の持腐に至ては蓋し天下の不經濟是より甚しきものあかる可きなり

文學博士黒川眞頼君小傳

朝に道を聞て夕に死ととも可なり雖股懸梁以て學業を切瑳と豈啻輕々易々の業あらんや君は故の黒川春村翁の一子なり翁は一世の國學者にして博く和漢の學を涉獵して窮めざるものあきは既に人の知れ

る所なり君幼より秀穎發達成人の如し七歳の時翁に就て和歌を詠し十七歳の頃ひ大寒一ヶ月間毎曉草野集全部を僅々數刻に誦了せり長きるに及んで益々強記大に古典に通曉と
君文政十二年十一月を以て江戸に生る父祖の業を繼で専ら志を國學に傾け洽く皇朝史乘の沿革を考覈して大に得る所あり尤も史學并に古語に委しく又和歌を善くと其漢學に於ては經書及老莊韓非に精通せり

明治二年四月府縣學校取調御用掛仰付らる八月大學少助教に任せられ十二月中助教に任せらる同四年七月文部權大助教に任せられ十月文部省九等出仕に補せらる同六年二月吉田神社宮司兼權大講義に補せらる三月之を辭し八月文部省御雇申付らる同八年二月元老院權大書記生に任せられ十二月大書記生に任せらる同十年一月五等書記生に任せられ六月内務四等屬に任せられ博物館事務取扱命せらる七月

史傳課長心得を命せらる同十二年十二月三等屬に任せらる同十四年
 内務省准奏任御用掛仰付らる三月内國勤業博覽會審査官仰付らる四
 月農商務省准奏任御用掛仰付られ八月博物館史傳課長兼圖書課長仰
 付らる十月東京學士會員に撰擧せらる同十六年十一月農商務權少書
 記官に任せらる十二月正七位に叙せらる同十七年三月第二回内國繪
 畫共進會審査官を命せらる同十八年十二月非職仰付らる同十九年十
 一月御歌掛寄人仰付らる全廿一年六月御歌所寄人仰付らる全月文學
 博士の學位を授けらる時に歳六十なり

其在官中編輯又は著述せし書目は語彙、國史要畧、歷代天皇御謚號讀例、
 全考證、皇位繼承篇十卷、全御系圖二卷、三種神器篇、工藝志料、穴居考、石器
 考、天日槍歸化時代考、蘇耶曷叱來朝考、職工類考證三卷、考古畫譜增補等
 にして又昨年五月古事類苑編纂委員の任を囑托せらる
 君始め家庭の教訓を受け後ち専ら獨學の力に依りて遂に此く一大學

者の位地を占むるに至れり故に六十年來未だ嘗て贊を取つて業を受
 けしことなしと云ふ以て其苦學の致るところあるを見るべし

野史氏曰人苟も邦土に生る亦其風土人情を知らざる可からむ其之を
 知らんと欲せば遠く史乘に遡りて之が淵源を究めざる可からむ故に
 近きを學ばせして遠きを學び此を究めせして彼を究めんと欲する者
 は抑亦誤れりと謂つべし語に曰く國境に入らば先づ其禁を問ふと嗟
 今の青年輩徒らに近きを忘れて志を遠きに馳せ以て犯禁の笑を招く
 こと勿れ

法學博士井上正一君小傳

君は舊山口藩士あり嘉永三年二月廿五日長門國大津郡伊上村に生る
 父の名は正健、謹直を以て聞ゆ君幼よりして秀才あり遠く群兒の上に
 出づ年十三始めて萩明倫館に入つて漢籍を修め後又文學寮に入學そ

明治元年京都に出で江馬天江に就て詩文を學び幾許くもなくして上京し箕作麟祥氏の門に入りて佛學を修む

明治三年開成學校に入り明年更に貢進生とありて大學南校に入學して普通學を修め同しく五年八月南校を退學して司法省明法生徒とあり専ら法律學を修業し八年八月法學修業の爲め佛國留學を命せられて之に航し十月巴里専門校に入りて滿二ケ年間法學を研究し同校法學「バツシユリエー」に及第して証狀を受け更に一ケ年間全校に於て法理を研究して法學全科を卒業し法律學士の學位を受く時に留學滿期に際するを以て更に延期を官に請ふ官之を容れ遂に三ケ年の延期を以て是に於て「ソヂヨン」府法學専門校に入學して法理の蘊奧を極め十四年七月全校博士試験に及第して法學博士の學位を受領し尋て歸朝したり明治十四年九月司法省雇申付られ月給金百三十圓給與せられ同十七年十一月法律學士の稱號を授けらる同十八年四月訴訟規則取調委員

仰付らる八年司法省准奏任御用掛を命せられ月給百五十圓給與せらる同十九年二月翻譯課長仰付らる三月司法書記官に任じ總務局文書課長兼務仰付らる四月奏任官三等に叙し上級俸を下賜せらる七月從六位に叙せらる八月判事登用試験委員仰付らる九月民法草案編纂委員を命せらる同廿年二月法學生徒教授を命せらる十一月法律取調報告委員仰付らる十二月司法參事官に任せらる同廿一年六月法學博士の學位を授けらる

是より先き君の佛國にありて博士試験に應じたるどきの論文は羅馬及佛の二文にて債權讓渡の論題ありしと云ふ

君人と爲り寛裕澹泊人に接する常に温顔を以てす一見舊識の如し眞に其佛國大學の法律家たるに負うと云ふ

野史氏曰佛法は成文法あるを以て法律制定上大なる功用を奏すべし況んや君は佛法の蘊奧を極めり他日の著功日を期して待つべきなり

理學博士小藤文次郎君小傳

君は島根縣の人舊津和野藩士なり父を小藤治生と謂ふ名筆を以て聞ゆ君安政三年三月四日石見國鹿足郡津和野に生る天資温厚機敏にして學を好む若年の頃より既に藩設養老館に入て和漢學を修むると六年明治の三年九月藩の貢進生となりて上京し十二月大學南校に入り後ち開成學校となりて地質學を專修し十二年七月大學地質學科を卒業して理學士の學位を受け同月内務省准奏任御用掛を拜命し月俸金六十圓を賜ひ地理局勤務を命せらるる明年三月更に勸農局勤務となり尋て職を辭し十月地質學修業の爲め滿三ヶ年間獨乙國へ留學中學費并に往返旅費を貸費せらるゝの恩命を受けて渡航し十四年一月「ライプツヒ」府大學に入り明年十一月又「シユンヘン」大學に轉し十六年十一月「ライプツヒ」大學に於て理學博士の學位を受けて歸朝と

明治十七年五月文部省准奏任御用掛仰付られ年俸千二百圓下賜せら

る同月大學理學部講師の任を囑せられ又諮詢總會々員に撰舉せらるる同十八年十一月農商務省御用掛兼勤を命せられ手當として年金百五十圓下賜せらるる同月地質調査所勤務を命せらるる同十九年一月兼勤免せられ二月更に地質調査事業を囑托せらるる三月理科大學教授に任せらるる四月奏任官三等に叙し下級俸下賜せらるる五月地質學講義慰勞として金五十圓贈與せらるる七月從六位に叙せらるる十月地質事業報酬として金百五十圓下賜せらるる同廿年六月小學校教科用地理書編纂趣意書審査委員を命せらるる同廿一年六月理學博士の學位を授けらるる同月應募編纂小學校用地理書審査委員を命せらるる又中學師範教員學力試驗委員を命せらるゝと前後三回又地質調査の爲め各縣下へ出張を命せらるゝと三回にして十縣下と

君始め大學に於て地質學を卒業し又曩に獨乙國に於て「ドクトル、フィロソフィー」の學位を受く其學術の進歩推して知るべし夫れ一業一事と

して苟も此學の比陰を蒙らざる者亦く就中農に衛生に地震學上には最も密接の關係を有して離れざるものと謂ふべきなり
野史氏曰地質事業の今日に急務あるは今此に喋々を要せ今より以往將に益々此學の功用を感ぜるの時期大に至らんとせざるあり

醫學博士佐々木政吉君小傳

君は佐々木東洋先生の養子あり先生は曩に醫術を以て天下に鳴る今尙都下駿河臺に一大病院を開て常に數百人の患者をして之に寄宿せしめ親ら之が監督の任に當れり君安政二年十一月十一日江戸本所花町に生る天資敏達少より學を好む幼時家庭の教訓を受け年稍長じて蘭學を諸名家に受け明治四年始て東京醫學部に入て七夕年間醫學を修めて遂に十一年三月大學醫學部卒業大試験に及第して醫學士の學位を受け其翌年自費を以て獨乙國に留學し同國伯林大學に入て醫術

の深理を研究し居ると五年學成り業終へて歸朝するや大學講師に擧げられて月俸百廿五圓を賜ひ尋で脚氣病審査委員を命せらる十八年九月東京醫術開業試験委員仰付られ十九年三月醫科大學教授に任じ奏任官三等に叙し中級俸下賜せらる六月大學紀要編纂委員を命せられ七月從六位に叙せらる廿一年六月上級俸を賜ひ又醫學博士の學位を授けらる曩に君の獨乙に在るや大學助手となり又研究生となりて醫術上の要點を發明し大に名譽を博せしと云ふ君は東京の人舊幕士なり君醫學に於ては修めざるものかし然れども最も内科に長ずるは世の汎く知る所にして我大學出身醫學士中病理學を稱するときは必き君を推すと云ふ

野史氏曰醫學中内科の困難なる外科より更に一層甚しきものあり是れ他なし其病理の由て起る所のものを發見するに苦めばなり

工學博士高松豐吉君小傳

君は東京の人なり嘉永五年九月十一日江戸淺草阿部川町に生る父を嘉兵衛と稱して名主を勤めり君六歳の頃ひ讀書を始め記臆群兒に超ゆ歳十三にして舊東京天文台主中西金吾氏に就て數漢二學を修む時偶ま王政復古の偉業に際し江戸を改て東京と稱し尋て名主を廢して戸長を設けらるゝに當り君亦父の職を助けて傍ら己れの學業に従事し刻苦黽勉業大に進む

明治四年三月大學南校に入て英語學を修め八年開成學校に於て普通學科を卒業し尋て東京大學に入て化學を專修し十一年七月大學を卒業し十一月東京師範學校の雇教師(月俵六十圓)となり翌年四月遂に官撰を以て英國に遊學し十月「マンチエストル」府「サイエンス」大學に入て凡二ヶ年間理化并製造化學を修め十四年二月倫敦府化學會員に擧げられ六月全大學に於て製造化學の定期大試験に應して最高點を得褒

賞として書籍二卷を受領し尋て英國を去て獨乙に赴き十月伯林大學に入て更に製造化學の蘊奧を研究し十五年三月亦全府の化學會員に撰ばれ四月再び英國工業化學會員となりて八月歸朝と
 明治十五年九月文部省准奏任御用掛仰付られ月俸百圓下賜し大學理學部勤務を命せらる十月諮詢總會々員に撰擧せらる同十六年一月大學豫備門兼勤仰付らる同十七年一月東京大學教授に任し年俸千五百圓下賜せらる同月正七位に叙せらる同十八年上野公園開設繭糸織物陶漆器共進會委員仰付られ六月英文讀本編纂委員仰付らる八月化學品取扱所監督兼務を命せらる九月東京職工學校應用化學教員の任を囑せらる十月學藝志林編輯事務委員を命せらる同十九年三月工科大學教授に任し奏任官三等に叙し下級俸下賜せらる七月從六位に叙せらる全月職工學校講義の報酬として金五十圓下賜せらる同月尋常師範學校用化學書編纂委員を命せらる同廿年三月東京工藝品共進會出

品審査官を命せらるる四月中級俸下賜せらるる十月東京職工學校兼務を命せらるる同廿一年六月工學博士の學位を授けらるる
 君人と爲り温厚篤實事に當て驚かば學を修めて倦まば其會て開成學校に在るや最も忍耐と勉強とを以て著はると云ふ
 野史氏曰製造化學功用の無邊廣大なるは今此に之を喋々とするを要せば人試に眼に着き手に觸るゝものを舉げて之を問へ恐らくは一として化學の力を假らざるものなかるべきあり

文學博士南條文雄君小傳

君は福井縣の人なり嘉永二年五月十二日福井城下に生る少より慧智あり韶齒の頃ひ既に佛經大意を了解と長むるに従ひ發才衆に起ゆ年十八般若經を讀み始て佛敎の微妙眞理を盡せるを覺り爾來名僧碩徳に就き大に經典の妙理を攻究と

明治の初年西敎の漸く盛にして佛敎の將に衰頽に陥らんとするの兆あるに當り君慨然として思へらく佛敎をして千載不易の基を立てしめんと欲せば須く海外に航して西敎の濫奥を探り又其論客名士と交通して識見を擴め以て他日破邪顯正の資に供するに非ざんば佛敎何に因てり護るを得んやと是に於て決然三衣を脱して洋服に易へ單身命を擲て桑梓を辭し萬里の波濤を渡り英國に航し同國牛津大學に入學して梵學學士「マリスムラール」に就て刻苦奮勵殆んど八ヶ年にして同校を卒業し「マスター、オファ、アーツ」の學位を受け心中錦を着て歸朝の途に就けり
 君の歸朝するや東京大學に大谷派敎授に各宗寺院に其他到る處君を招聘して其講義を聞く今現に大谷派敎授の任を帯びて尾州にあり其身殆ど寸隙なしと云ふ抑も梵學は泰西各國高尙の學とあして人々之を修むるを難とあし其學概ね十ヶ年を費さば其業を卒る者なし

と西人尙且然り況んや君は素修年あるに非を飄然挾む所るあくして直に彼國に航し以て遂に「マスター、チフ、アーツ」の學位を得たるは君の一大名譽と謂はざる可からざる是れより先き君の牛津大學に在るや我經文を英譯して世に公にし又は梵文經典の誤字を訂し或を論文を著述して發行せしかば忽ち神學社會に其名を知らるゝに至り爾來博士學士輩と洽く交通して大に益する所あり此他西人の耳目を驚かせしもの尙一にして足らざると云ふ或る人君を評して古昔の玄裝三藏終南大師に比するものあり説の當否は姑く置て論せざるも亦以て佛學者中傑出の人物たるは更に疑を容れざる所なり

野史氏曰西教の據る所の天を主とし佛敎の説く所は人を主とし其天を主とし人を主とし其到る所は則ち一矣只佛敎は説き得て廣漢人をして信じ易からざらしむ是れ佛敎の今日將に心を用ゆべき點あらん歟

法學博士熊野敏三君小傳

君は舊山口藩士なり父の名は右仲母は横山氏なり家世々武を以て毛利侯に仕ふ君は安政元年十二月を以て長門國阿武郡萩松本弘法谷に生る少より奇才あり嬉戯群兒と異れり六歳の頃一日某社に詣り君懇懃心に祈る所あるが如し其母之に問て曰く汝何をか祈る答て曰く大將を祈ると蓋し當時尙武の世只大將は無上の榮位なるをのみ兒腦に記せるが故なり長老るに従ひ始て學に志を傾けり

君幼名は猪三郎と稱せ幼にして父を亡ひ獨り母の養育を受く年甫て十一在郷松下塾に入り馬島甫仙に就きて漢學を修め明治四年三月を以て上京して佛學を修め五年三月開成學校に入學して佛語を學び七月明法寮生徒とあり専ら法學を研究し八年八月法學修業の爲め佛國留學を命せられ巴里大學に入つて佛學を修め凡そ三ヶ年にして全大

學を卒業し法學士の學位を受く爾來研究生となりて法理を講ずるの
 際偶々三好判事洋行して巴里に來れるを以て之が補助をなし十六年
 七月更に法學博士の學位を受けて歸朝す
 明治十六年十二月司法省雇申付られ月俸百卅圓給與せらる同十七年
 十一月法律博士の稱號を授けらる十二月文部省雇申付られ東京法學
 校勤務を命せらる同十九年二月檢事に任じ六等官相當年俸千五百圓
 を給與せられ東京控訴裁判所詰仰付らる同月民法編纂局兼勤仰付ら
 る四月司法省參事官に任じ奏任官三等に叙せらる同月民法草案編纂
 委員仰付らる七月代言人試験委員を命せらる七月從六位に叙せらる
 十二月判事登用試験委員仰付らる同廿一年一年海軍主計學校教授を囑
 托せらる三月代言人試験委員仰付らる四、八兩月判事登用試験委員仰
 付らる十一月法律取調報告委員仰付らる同廿一年六月法學博士の學
 位を授けらる

君氣宇曠開裁決流るゝが如し故に事務を理する極て迅速に處方立
 ころに成る以て其敏才の然らしむる所あるを見るべし
 野史氏曰君少時大將を祈る大將の蓋し啻に兵を揮き軍を督するの謂
 に非ぞ一局長大將なり一課長亦大將なり其他一業一事苟も人の長た
 る者亦皆大將に非ざるは無きなり余亦君の大に大將たらんとを望囑
 して止まざるなり

理學博士笑作佳吉君小傳

君は東京の人舊作州津山藩士なり安政四年十二月一日江戸鍛冶橋内
 松平三河守邸内に生る父は笑作秋坪先生にして既に載て君の實兄菊
 池理學博士の傳に在り君幼より靜默性驅馳の狀を爲すを好まず常に
 好て動植物圖を展觀して自ら樂む慶應元年緒方洪哉の内にあり保田
 東潜に就きて學業を修め後ち家庭にありて大に蘭英二語を習ひ明治

四年慶應義塾に入つて英書を講し明年一月大學南校に入り普通科を修む此時に當て君感する所あり奮然洋行の念を起し六年二月米國に渡航し四月「コンチンチカット」州「ハルトフォード」中學に入學して普通科を學び八年九月更に「トロイ」府「ボクテクニツ」學校に入り十年一月遂に「ニューヘブロン」府「イエール」大學に入て動物科を専修し凡そ二ヶ年半にして全科卒業「ハッチェロル、オフ、フロソフヒ」の學位を受け十二年七月全「國」チエサビーン「海濱動物實驗場」に於て動物學を研究し又「メリーランド」州「ジョンズ、ホプキンス」大學に入て更に動物學の蘊奥を極め全校の研究生に擧げられて二百五十弗を受け十三年五月又全校の「フェロー」に撰擧せられて年金五百弗を受け十四年二月米國を辭して英國へ渡り「ケンブリッヂ」大學動物學教授「ハルフオール」に就て尙其眞理を研究し佛、白耳義蘭、獨、埃、以、六ヶ國を遊歴して十二月歸朝と

明治十四年十二月文部省准奏任御用掛仰付られ年俸千二百圓下賜せ

らる同月理學部勤務仰付らる同十五年一月諮詢總會會員に撰擧せらる十一月水産博覽會委員を命せらる十二月東京大學教授に任し年俸千五百圓下賜せらる同十六年二月正七位に叙せらる同年米國「ジョンズ、ホプキンス」大學より理學博士の學位を贈與と同十八年六月英文讀本編纂委員仰付らる十月學藝志林編纂委員を命せらる同十九年三月理科大學教授に任せらる四月奏任官三等に叙し中級俸下賜せらる同月東京高等女學校主幹の任を囑せらる七月從六位に叙せらる同廿年十月高等女學校長に兼任と同廿一年三月兼官を免せらる六月理學博士の學位を授けらる同月上級俸下賜せらる又中學師範教員學力試験委員を命せらる、こと前後三回又水陸動物採集或ハ學術研究の爲め各縣下へ出張を命せらる、こと七回にして三縣とと

君海外に留學すること殆んど九ヶ年其間刻苦奮勉一日の如く其米國に在るや「イエール」大學を卒業して理學得業生の稱號を受け後又「シヨ

ンスホプキンス大學より理學博士の學位を受く其曩に同校に在るや
 研究生に擧げられ又「フェロー」に撰ばれ且つ年金若干を受くるに至る
 以て其學術の優等なましを知るに足るべし
 野史氏曰動物の種類を研究して以て人類の起源を知り亦我地球變遷
 の程度を測る豈又人生の快事に非ずや

醫學博士緒方正規君小傳

君は熊本縣の人舊細川藩士なり通稱は源喜嘉永六年十一月五日肥後
 國八代郡種山郷川俣村に生る資性敏達少よし學を好む六歳の頃ひ習
 字を始め後ち藩立學校に入て漢學を修め年漸く長じて醫學に志す
 明治三年十月始て熊本醫學校に入て醫學を修め五年春上京して大學
 南校に入り獨乙學を學び九月更に大學東校に入り凡そ七ヶ年間醫學
 を修めて全課を卒業し十二年八月流行病性取調掛を申付られ日給一

圓廿五錢其明年四月東京大學醫學部に於て卒業大試験に及第して醫
 學士の學位を受け九月大學雇とあり月給卅圓て醫院に在勤し十月官
 選を以て滿三ヶ年間生理學並衛生學修業の爲め獨乙國へ貸費留學の
 命を受けて之に航し全國「ライファヒ」大學に入て生理學を研究し後又
 「シユンヘン」大學に轉し既にして又柏林府衛生局に在學し十七年二月
 に至て遂に大學助手に擧げられ尋て歸朝と

明治十八年二月東京大學准奏任御用掛仰付られ月俸百圓下賜し醫學
 部勤務仰付らる同月内務省御用掛兼勤仰付られ月給三十圓下賜せら
 る八月五十圓に進めらる同十九年三月醫科大學教授に任せらる四月
 奏任官三等に叙し上級俸下賜せらる同年脚氣病審査委員を命せらる
 七月從六位に叙せらる十一月中央衛生會委員を命せらる九月帝國大
 學衛生委員を命せらる同廿一年六月醫學博士の學位を授けらる
 是より先き君獨乙に留學とると三年大に生理衛生の二學を究め遂に

大學助手たるの名譽を得たり蓋し泰西の助手は本邦の所謂助手とは大に之と異にして専ら學理を研究し實地を講ざるを以て目的とし又苟も助手の講堂に登て講義を爲すあれば博士も大博士も之を傍聽せるが故に又名譽研究生の稱ありと云ふ

君又多年脚氣病理の研究に従事せしが遂に屢に脚氣「バルチン」を發見し當時醫學者中の一大問題と成り居れり

野史氏曰我大學卒業の諸學士漸く其數を増して遂に今日學術上の一

大進歩を來その時運に向へり豈亦賀す可きに非ざや

工學博士平井晴二郎君小傳

君は石川縣の人なり安政三年十月十六日金澤城下に生る幼にして伶俐又尤も學術を好み常に隣人の賞譽する所たり年漸く長じて藩立學校に入て和漢及英學を修め明治三年の頃ひ上京して大學南校に入て

普通學を修め後開成學校となるに及で工學を專修そ八年官在校の生徒數名を撰抜して海外に留學せしむるや君亦其撰に加はり同年七月を以て之に航し九月新約克府「トロイ」府「レンセル」大學に入學して工學を修め居ると凡そ二ヶ年半にして全科卒業土木工學士の稱號を受け十一年に至て全府中の工學建築類調査に従事し又晝間は日々「モルガン」製鐵所に到て其工作現場を寫影し夜間は専ら佛語學を修めり

明年に至て更に同國測量司に従て「ミスシッポイ」河畔を測里し爾後重に實地研究に従事し十三年七月同國を去て英佛二國を經歷して歸朝の途に就けり其歸朝するや當時恰も北海道鐵道布設の工業最中にして松本氏將に之が事務副長たり依て氏君を擧げて札幌以北の事業に當らしむ君乃ち之を諾し鐵道技師と成て大に之に盡力し遂に全道布設工事の落成を告るに至れり其功亦大かりと謂つべし後ち功を以て正六位に叙せらる十七年松本氏去て東京に來るや君其後を繼で後事を

處理せり昨年大阪鐵道の計畫あるや轉じて之に移り目下専ら其創業の事務を執れりと云ふ今年六月又工學博士の學位を授けらる野史氏曰今日土木事業擴張の秋に際し苟も此學に長ざる者は朝に擧げられ野に用ひられ甲に聘せられ又乙に傭はれ其身殆んど寸暇なきに至れり嗟亦盛なる哉

日本博士全傳 大尾

官費海外留學生表 不撰順序

東京	鹿兒島	岩手	石川	岐阜	東京	同	石川	長崎	兵庫	熊本	愛知	岐阜	滋賀	東京
鳩山和夫	小村壽太郎	菊池武夫	齋藤修一郎	松井直吉	長谷川芳之助	南部球吾	平井晴二郎	原口要	古市公威	安東清人	新藤二郎	關谷清景	杉浦重剛	岡村輝彦
石川	大分	堺	山口	東京	石川	兵庫	兵庫	島根	朽木	福岡	岡山	愛媛	廣島	島根
櫻井錠二	増田禮作	谷口直貞	河上謹一	高松豊吉	石黒五十二	和田垣謙三	沖野忠雄	山口半六	山口坂六	寺尾壽	難波正	入江陳重	清水郁太郎	梅錦之丞
嶋根	熊本	新潟	東京	青森	大坂	静岡	東京	同	石川	東京	同	同	同	福岡
小藤文二郎	緒方正規	小金井良精	津田梅女	山川捨松女	九里龍作	飯島魁	榊島淑	三浦守治	高橋順太郎	都筑馨六	渡邊渡	木場貞長	末岡精一	井上哲二郎

法學士人名表

石川	斯波淳六郎	愛知	下山順一郎	東京	後藤牧太
東京	宮崎道三郎	熊本	濱田玄達	高知	土方寧
兵庫	片山國嘉	兵庫	河本重二郎	東京	篠田利英
愛媛	田中正	島根	梅謙二郎	宮城	中島銳治
岐阜	穂積八東	東京	加藤錦子	東京	坪井九馬三
東京	佐藤三吉	兵庫	野尻精一	同	中村貞吉
新瀨	藤澤利喜太郎	靜岡	金井延	合計	六十九人
福井	中澤岩太	東京	横山又二郎		

學士人名表

不撰順序

青森	○法學士	東京	本山正久	千葉	秋山源藏
愛媛	西川鉄二郎	滋賀	増島六一郎	高知	山下雄太郎
山口	藤田隆三郎	東京	大原謙三郎	全	末延道成
山	河上謹一	全	大谷木備一郎	石川	三宅恒徳
東京	島山重明	埼玉	高橋一勝	三重	宮崎道三郎
群馬	野村鈔吉	岡山	磯野斗	大分	元田肇

法學士人名表

石川	村山三郎	山口	渡邊安積	靜岡	石渡敏一
兵庫	大野金三郎	岐阜	三和親本	福井	高橋捨六
石川	入江鷹之助	東京	井原師義	山口	馬場愿治
東京	加瀬利次郎	山口	斯波淳六郎	東京	坪野平太郎
愛知	加藤高明	石川	伊藤悌次	長崎	莊清次郎
東京	秋山正議	新潟	榎山資之	岡山	田上省三郎
岐阜	合川正道	東京	西尾藤市	三重	藤田四郎
熊本	岡田源太郎	鳥取	片山清太郎	東京	太田保太郎
青森	松野貞一郎	東京	關直彦	長崎	澁谷懺爾
福岡	由布武三郎	和歌山	磯部醇	宮崎	平部淳佐久
三重	鈴木充美	岐阜	小野徳太郎	山口	植村俊平
新瀨	坂口佐吉	東京	江木衷	石川	戸水寛人
千葉	内田三省	鳥取	奥田義人	東京	岡野敬次郎
高知	土方寧	山形	香坂駒太郎	同	生沼永保
愛媛	三崎龜之助	兵庫	北代勝	愛知	柳原幾久若
兵庫	砂川雄峻	京都	荒川義太郎	京都	澤崎頼之助
大坂	山田喜之助	東京	荒川義太郎	京都	澤崎頼之助

四 法學士人名表

同	東	宮	熊	福	福	石	熊	靜	山	佐	東	慶	新	茨	熊	佐
京	崎	本	岡	岡	川	本	岡	岡	口	賀	京	嶋	瀉	城	本	賀
平	大	鈴	林	淺	林	早	內	一	高	石	宮	嗟	中	羽	乾	伊
沼	場	木	田	田	權	川	田	木	橋	井	岡	峨	野	生	孚	東
一	寬	馬	龜	知	助	千	康	喜	覺	常	恒	根	省	顯	孚	祐
郎	一	佐	太	定	助	吉	哉	德	郎	英	次	不	吾	親	志	德
和	佐	熊	福	同	長	福	山	東	岡	愛	長	同	同	東	兵	岡
歌	賀	本	岡	野	野	岡	口	京	山	知	野	野	野	京	庫	山
山	賀	本	岡	野	野	岡	口	京	山	知	野	野	野	京	庫	山
木	柿	田	太	兩	橫	城	佐	柿	鈴	永	小	棚	鹽	小	柴	平
下	原	代	田	角	田	數	藤	崎	木	井	松	橋	谷	出	原	田
友	武	律	峯	彦	秀	馬	信	欽	宗	久	謙	愛	恒	柳	龜	讓
三	熊	雄	三	六	雄	馬	信	吾	言	滿	次	七	太	太	二	衛
郎	熊	雄	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎
東	青	東	佐	石	山	佐	東	高	同	熊	福	同	東	靜	長	三
京	森	京	賀	川	形	賀	京	知	本	岡	岡	岡	京	岡	野	重
龜	藤	水	中	草	堀	野	板	川	龜	齋	福	市	松	遠	上	大
山	田	本	島	鹿	三	田	倉	田	井	藤	井	川	平	藤	條	倉
直	重	豹	靜	甲	友	藤	松	正	英	浩	清	勝	信	忠	慎	鈕
秀	守	吉	甫	子	友	吉	太	根	三	躬	石	之	英	次	藏	藏

五 法學士人名表

佐	三	岐	愛	全	千	福	東	靜	福	靜	同	同	東	山	千	佐
賀	重	阜	媛	葉	島	京	岡	岡	岡	岡	岡	岡	京	形	葉	賀
原	日	野	伊	松	木	瀧	渡	石	應	原	町	山	玉	板	津	石
口	置	村	藤	崎	內	田	邊	川	當	誠	田	本	置	垣	田	尾
敏	益	虎	主	藏	重	四	輝	錦	當	一	重	錚	慶	不	藤	一
行	益	次	計	之	四	郎	之	一	衝	備	助	之	次	二	男	郎
朽	東	佐	石	宮	滋	島	○	計	鹿	大	山	長	岡	東	佐	
木	京	賀	川	崎	賀	根	法	百	兒	坂	形	野	山	京	賀	
富	手	鶴	櫻	秋	河	梅	律	四	島	山	竹	戶	薄	武	宮	
谷	塚	丈	井	月	村	謙	學	十	大	口	村	澤	定	井	崎	
鉦	太	一	一	左	讓	次	士	三	浦	莊	欽	鼎	吉	才	政	
郎	郎	郎	郎	都	三	郎	八	人	佐	吉	郎	鼎	吉	次	吉	
東	同	佐	石	神	福	福	琦	福	山	宮	福	石	朽	滋	山	石
京	賀	賀	奈	奈	島	岡	玉	井	形	城	岡	川	木	賀	口	川
池	古	掛	清	小	小	松	志	米	栗	飯	寺	河	鶴	杉	前	田
田	賀	下	水	野	笠	室	方	村	原	田	尾	村	見	山	田	孝
輝	廉	重	一	衛	原	致	壯	壯	宏	宏	善	善	守	三	田	階
知	造	次	郎	門	真	致	宣	宣	作	作	益	益	義	保	田	階
		郎	郎	太	信	致	宣	宣	作	作	益	益	義	保	田	階

六 理學士人名表

宮城	春日慶之進	滋賀	上水長次郎	廣島	崎惠純	千葉	渡邊暢	熊本	平島及平	東京	百地宅憲	千葉	小川鍛吉	東京	河野彦治	大分	末弘巖石	東京	高須祿郎	岡山	久原久弦	石川	宮崎道正												
福岡	磯野德三郎	石川	高山甚太郎	茨城	伊藤新六郎	福岡	伊賀義美	同	福田良作	同	小林孝一	石川	中澤岩太	廣島	石藤豐太	靜岡	肥田密三	同	織田顯次郎	長崎	渡邊鏡次郎	東京	喜多村彌太郎	靜岡	甲賀宜政	廣島	吉田彦六郎	兵庫	石川巖	岡山	守屋物四郎	岐阜	渡邊讓	千葉	足立震太郎
岡山	松本收	石川	久田督	靜岡	今井省三	千葉	加藤常七郎	大坂	高橋鉸太郎	同	植田豐橘	同	石川彌太郎	東京	澤邊春水	愛媛	橘梅三郎	愛知	小出貫一郎	千葉	岩淵鑿	福岡	阪内冬藏	茨城	所谷英敏	高知	大石保吉	東京	吉岡哲太郎	新瀉	杉谷佐五郎	千葉	足立震太郎		

計三十三人
合計百七十六人

○理學士

七 理學士人名表

長野	吉武榮之進	靜岡	高嶋勝次郎	愛知	堀鉞之丞	大坂	松井元次郎	東京	增嶋文次郎	石川	横地石太郎	兵庫	安藤藤格	東京	坪井九馬三	愛知	村瀬光國	兵庫	田中正平	新瀉	藤澤利喜太郎	岩手	田中館愛橘	高知	酒井佐保	嶋根	山口銳之助	岡山	澤井廉	石川	早崎信太郎	靜岡	飯島魁	青森	岩川友太郎	石川	佐々木忠次郎	靜岡	石川千代松	東京	箕作元八	長野	齋田功太郎	東京	坂田貞一	石川	吉田明吉	大坂	五代龍作	福岡	横井佐久治	東京	川上新太郎	島根	田邊三男	福岡	横田正三郎	石川	石黒五十二	高知	仙石貢	同	三田善太郎	山梨	大森俊次	石川	新瀉	同	同	石川	兵庫	下村三一	土田鐵雄	石田二男雄	中原貞三郎	熊倉恭三	千葉	二見鏡三郎	東京	野尻武助	小柴保人	倉田吉嗣	岡	日下部辨二郎	青木元五郎	腰塚英	白石直治	野村龍太郎	原龍太	兵庫	下村三一	土田鐵雄	石田二男雄	中原貞三郎	熊倉恭三
----	-------	----	-------	----	------	----	-------	----	-------	----	-------	----	------	----	-------	----	------	----	------	----	--------	----	-------	----	------	----	-------	----	-----	----	-------	----	-----	----	-------	----	--------	----	-------	----	------	----	-------	----	------	----	------	----	------	----	-------	----	-------	----	------	----	-------	----	-------	----	-----	---	-------	----	------	----	----	---	---	----	----	------	------	-------	-------	------	----	-------	----	------	------	------	---	--------	-------	-----	------	-------	-----	----	------	------	-------	-------	------

八 理學士人名表

宮城	三浦健	山口	山縣脩	群馬	三浦宗次郎
石川	長崎桂	東京	松田武一郎	靜岡	奈佐忠行
宮城	中島銳治	愛知	永田貞祥	岩手	多田綱宏
石川	近藤仙太郎	石川	中野嘉作	山形	高橋豐夫
山口	大屋權平	三重	石川直記	石川	北條時敬
東京	野口嘉茂	鹿兒島	山田直矢	愛知	熊澤鏡之助
靜岡	山崎鉦次郎	山形	田嶋晴雄	福岡	寺尾壽
高知	和田義陸	島根	小藤文次郎	東京	千本福隆
東京	渡邊陸	長崎	巨智部忠承	同	信谷定爾
熊本	河野鮎雄	埼玉	山下傳吉	愛知	中村恭平
石川	岡田一三	長崎	西松次郎	石川	櫻井房記
長野	堀田連太郎	東京	富士谷孝雄	岡山	難波正
愛知	野呂景義	長崎	○橫山又次郎	山口	中村清男
同	原田慎治	大坂	中島謙造	秋田	谷田部梅吉
東京	大木良直	廣島	山田皓	福島	和田雄次
高知	和田義軌	東京	鈴木敏	新瀉	鮫島晋
同	大谷木喬	茨城	菊池安	滋賀	高野瀬宗則

九 理學士人名表

廣嶋	豐田周衛	神奈川	大谷津直麿	鹿兒島	木場貞長
東京	三輪桓一郎	福岡	柘植千嘉衛	長崎	中隈敬三
德嶋	三守守	靜岡	神保小虎	東京	岡倉覺三
長崎	桐山篤三郎	岐阜	大塚專一	高知	福當孝季
廣嶋	鹽田仁松	靜岡	松嶋鉦四郎	山口	末岡精一
大坂	小林有也	愛知	柴田初治郎	東京	○坪井九馬三
滋賀	澤野忠基	秋田	狩野亨吉	同	都筑馨六
長崎	玉名程三	靜岡	平山信	同	辰巳小次郎
大坂	保田棟太	東京	芦野敬三郎	兵庫	嘉納治五郎
靜岡	平山順	合計	百六十六人	山口	田中稻城
慶嶋	實吉益美	○文學士		東京	有賀長雄
長崎	長岡半太郎	兵庫	○和田垣謙三	廣島	高田早苗
東京	木村駿吉	兵庫	○和井哲二郎	長崎	山田一郎
同	牧野清利	福岡	○井上哲二郎	石川	天野爲之
靜岡	坪井正五郎	兵庫	○國府寺新作	靜岡	三宅雄二郎
東京	穴戶一郎	高知	千頭清臣	愛媛	梅若誠太郎
同	白井光太郎				穂積八東

醫學士人名表

東京	愛媛	山口	福岡	東京	岡山	大坂	東京	大坂	岡山	岩手	石川	愛媛	愛知	福岡	愛知	長野
春日秀朗	加藤彰廉	藤山裕二	添田壽一	土子金四郎	平沼淑郎	濱田健次郎	久米金彌	中川恒次郎	坂谷芳郎	中原貞七	小川忠武	前川龜次郎	坪内雄藏	鶴原定吉	木村竹次郎	飛原朝之助
山口	長野	東京	靜岡	同	愛知	山梨	宮崎	靜岡	鹿兒島	埼玉	鹿兒島	靜岡	新潟	東京	廣島	東京
山口	澤柳政太郎	梅本順三郎	岡田良平	德永滿之助	板倉銀之助	長澤市藏	日高眞實	本間六郎	三原經國	黒川雲登	長崎剛十郎	金井延	井上圓了	棚橋一郎	杉江輔人	原川權平
茨城	大坂	新潟	山形	靜岡	同	長野	新潟	千葉	鹿兒島	石川	岡山	○醫學士				
原田	岡崎	山崎	三瀨	山崎	須田	室賀	石川	濱野	鹿兒島	吉田	河野	合計五十六人				
豐	立	立	謙	恭	哲	録	仲	昇	大多和七郎	田貞準	貫道	愛知 上田萬年				

醫學士人名表

秋田	愛知	東京	廣島	千葉	和歌山	秋田	群馬	山口	滋賀	新潟	石川	山口	東京	靜岡	東京	靜岡
鳥瀨恒吉	新藤二郎	佐々木政吉	清水郁太郎	大川宗炳	印東玄得	中村良益	櫻井郁次郎	小野敦善	三浦浩一	長谷川順次郎	渡邊悌次郎	野口安次	三浦省軒	松澤元貞	菅野順明	宇野野
熊本	山口	愛媛	京都	石川	東京	同	山口	青森	高知	靜岡	新潟	熊本	北海道	山形	靜岡	靜岡
濱田	半井英輔	神內由巳	高階經本	魚住完治	佐藤一之助	熊谷玄三	熊谷省三	佐々木文蔚	野並魯吉	片山國嘉	石黒宇宙次	河野徂	梅錦之丞	田澤敬興	大森治豐	清野勇
東京	新潟	東京	岐阜	東京	愛知	京都	高知	愛媛	靜岡	愛知	靜岡	朽木	同	東京	熊本	新潟
三浦守治	外山林助	菅之芳	沼浪貞吉	石川公一	鈴木孝之助	神田知二郎	弘田長一	長尾精一	杉田雄	伊勢錠五郎	伴野秀堅	小林廣	伊藤盛雄	伊藤盛雄	緒方正規	小金井貞精

二十 醫 學 士 人 名 表

石川	高知	千葉	同	長野	新瀉	東京	山形	秋田	山口	石川	靜岡	東京	長崎	東京	長崎	東京	東京
高橋順太郎	中濱東一郎	伊部	佐藤	片山芳林	甲野柴	森林太郎	小池正直	熊谷幸之助	山縣直吉	山形仲藝	猪原吉郎	谷口謙	森永友健	榎本與七郎	中村正道	佐野龍太郎	東京
宮城	長崎	京都	東京	千葉	石川	愛媛	朽木	千葉	長崎	岩手	東京	神奈川	長崎	岐阜	長崎	岐阜	岐阜
奈良坂源一郎	菊池常三郎	新宮涼亭	神保文輔	加古鶴所	魚住以作	長町耕平	江口襄	飯田信順	島田完吾	及川良吾	鹿島武雄	坂本常長	高木文種	古川榮郎	佐藤三吉	山	山
東京	石川	東京	兵庫	朽木	千葉	東京	靜岡	東京	福井	石川	山口	山	長野	大坂	岡	靜岡	山
青山胤通	柴田勝央	瀬川昌耆	猪子止戈之助	佐藤廉	富永伴五郎	太田彌太郎	朝川順三	田代正	小倉開治	吉益政清	熊谷茂樹	西郷吉義	緒方收二郎	芳村晋	相磯	山根正次	山

三十 醫 學 士 人 名 表

靜岡	和歌山	靜岡	京都	同	兵庫	東京	德島	東京	兵庫	同	京都	靜岡	靜岡	靜岡	山	同	長崎	愛媛	長崎	山口
戸塚卷藏	神中正雄	遠藤洋	吉田興三	齊藤仙也	河本重次郎	大谷周菴	内田守一	隈川宗雄	齋藤爲信	川原汎	磯原	北里柴三郎	高橋盛一	池田陽一	浦島堅吉	山根文策	山口	長崎	愛媛	山口
大坂	同	福井	同	東京	朽木	東京	長崎	島根	京都	福島	大坂	三重	福井	福島	兵庫	京都	山口	長崎	愛媛	山口
中山專太郎	緒方太郎	木村孝藏	佐々木曠	尾澤主一	川俣四男也	岩佐登彌太	鶴崎平三郎	千原春甫	劉小一郎	南二一郎	眞部於菟也	淺田決	黒柳精一郎	村田謙太郎	松崎廉	淺山郁次郎	同	長崎	愛媛	山口
東京	朽木	新潟	宮城	長崎	山形	石川	靜岡	群馬	埼玉	山口	東京	京都	同	同	同	同	同	長崎	愛媛	山口
宮下俊吉	本田忠夫	長谷川寛治	棟方隆	木島玄雲	栗本東明	山崎兵四郎	荻生録藏	岡文藏	山本次郎平	山本次郎平	坪井次郎	馬杉則知	井上平造	澤邊保雄	佐野譽	天谷千松	同	長崎	愛媛	山口

四十 醫 學 士 人 名 表

青森	千葉	高知	神奈川	山形	岡山	群馬	長崎	佐賀	宮崎	福岡	群馬	愛知	東京	徳島	長野	福島
伊東	小川三之助	楠正臣	鈴木愛之助	二宮誠一郎	更井久庸	堤宗卿	原田元貞	原長氏	日高昂	菅沼貞吉	大西秀治	稻野權三郎	奥田道有	鎌田満太郎	星野秀太郎	高本友枝
愛媛	滋賀	愛知	大坂	福井	山形	愛媛	山口	福井	佐賀	東京	新潟	東京	静岡	兵庫	山口	宮城
柏原長英	岡田國太郎	三輪徳寛	常持爲治	武田坦	水野廉平	高畑挺三	島田武次	花房道純	三田久泰	松井秀二郎	桂秀馬	佐藤恒久	内田萬平	齋藤春香	柳琢藏	木村武五郎
熊本	神奈川	愛知	兵庫	佐賀	山形	同	東京	山形	福岡	長崎	岡山	東京	青森	新潟	京都	兵庫
山田謙治	井上豊作	山崎幹	北村徐雲	保利真直	鳥居春洋	池原康造	馬島永徳	栗木庸勝	有松戒三	榎林國三郎	高山尙平	高安右人	太田弘安	瀬尾原始	廣瀬佐太	猪子吉人

五十 醫 學 士 人 名 表

徳島	群馬	東京都	東京	同	佐賀	東京	大分	島根	石川	埼玉	兵庫	新潟	福島	同	愛知	岐阜
撫養圓太郎	星代善夫	牧田安藏	島村後一	竹中成憲	保利成憲	牧山建吉	渡邊棟三郎	足立健三郎	土岐文二郎	山村直次郎	神田翁次郎	布施禎二	三浦謹之助	芳賀榮次郎	大澤嶽太郎	汪馬賤男
新瀨	愛媛	岡山	東京	山口	岡山	山口	福井	東京	兵庫	静岡	東京	滋賀	京都	熊本	新潟	神奈川
甲野泰造	大西克孝	阪田快太郎	松村三省	千葉稔次郎	能勢静太	宍道弘一	大西小三太	宇山道碩	匹田復次郎	柴田耕一	肥成治	高橋剛吉	堀内篤藏	小山龍徳	山田岩次郎	波多野惇
鹿兒島	群馬	福井	秋田	千葉	東京	山形	福島	同	同	同	同	同	同	同	同	同
上原直之進	生駒龍太郎	佐々木達	川瀬泰輔	森友道	加藤吉忠	小池亮琢	宍戸宗之助	同	同	同	同	同	同	同	同	同

合計二百五十八人

○製薬士

下山順一郎	丹波敬三	吉田學	小山哉	高橋三郎
-------	------	-----	-----	------

十七 表 名 人 士 學 工

同	靜岡	兵庫	靜岡	東京	岐阜	山口	東京	京都	鹿兒島	熊本	山形	福島	大坂	靜岡	北海道	愛媛
小田川全之	宮城島庄吉	河野天瑞	田邊朔郎	渡邊嘉一	吉川三允	植木平之允	笠井愛次郎	野邊地久記	大島仙藏	高田雪太郎	屋代盛孝	江森盛孝	足助好生	香取多喜	佐藤成教	佐伯敦崇
山口	東京	熊本	佐賀	福岡	靜岡	東京	大坂	茨城	東京	愛媛	群馬	京都	岐阜	石川	廣島	東京
荒川新一郎	三好晋六郎	高山直質	福岡清一郎	牧野實	友成仲	相澤時正	吉村長策	小川東吾	古川阪次郎	吉村龜三郎	久米民之助	船曳甲	清水保吉	上山基	河野十三郎	山口準之助
同	靜岡	山口	靜岡	熊本	長崎	山口	長崎	青森	東京	山口	愛媛	靜岡	千葉	長崎	東京	同
貴志泰	眞野文二	服部俊一	臼井藤一郎	家入安	早田喜勉	吉見九郎	岡實康	藤田重道	野上由貞	竹田關太郎	佐立次郎	坂田三	原田虎三	安永義章	宮崎航次	今田清之進

六十 表 名 人 士 學 工

東京	長崎	山口	石川	山形	群馬	秋田	石川	長崎	山口	愛知	山口	東京	長崎	岐阜	佐賀	長野
曲淵景章	田原良純	日野政太	細井修吾	高橋秀松	八木長恭	溝口恒助	山田耕一	島田耕一	乃美辰一	藤本理	曾根次郎	櫻井小平太	納富嘉博	三村德太郎	丹羽藤吉郎	高橋増次郎
福岡	○准醫學士	淺川岩瀨	合計三十四人	岩手	山口	愛知	千葉	愛知	靜岡	東京	島根	東京	兵庫	東京	埼玉	町田
東京	群馬	三重	靜岡	千葉	山口	靜岡	青森	○工學士	合計六人	兵庫	愛知	千葉	三重	福岡	小林	海
飯塚義光	澁谷競多	千種基	太田六郎	達邑容吉	小林八郎	石橋綱彦	南橋	赤鹿東策	大河内和	柳下貞桶	柳下貞桶	橋下良詮	橋下良詮	小林玄海	小林玄海	小林玄海

八十 工學士人名表

東京	山崎	岐口	長崎	石川	熊本	靜岡	山形	山形	埼玉	東京	新瀉	京都	山口	愛媛	兵庫	三重
內藤政共	栗屋新三郎	子安雅	田中林太郎	井口在屋	中原淳藏	川井清三郎	齋藤恒三	香坂季太郎	栗塚又郎	水上彦太郎	稻垣銚平	岩崎彦松	進經太	菊池恭三	畑精吉郎	龜田末道
岡山	新潟	愛知	佐賀	東京	佐賀	長崎	佐賀	靜岡	山口	東京	同	廣島	茨城	山口	三重	埼玉
岩田善明	小山吉郎	福田馬之助	杉谷安一	青木恭	松尾鶴太郎	小西慎三郎	志田林三郎	岩田武夫	藤岡市助	熊倉興作	中野初子	淺野應輔	飯田格之助	柏村孝正	大井才次郎	山川義太郎
福岡	山形	山口	福岡	大坂	京都	石川	大坂	山口	千葉	東京	高知	東京	長崎	埼玉	熊本	石川
森島剛太郎	五十嵐秀助	坪井孝	岩垂邦彦	小高梅三郎	玉木辨太郎	永山廉太郎	長谷川廷	神田選吉	青木大三郎	高峯讓吉	森省讓吉	中村貞吉	深堀芳樹	岸真二郎	築山鏑太郎	今井善一

九十 工學士人名表

靜岡	熊本	福井	岡山	岐口	石川	廣島	長崎	同	東京	靜岡	大坂	佐賀	山形	山口	愛媛	大分
河喜多能達	松平忠太郎	坪和為昌	清水鐵吉	藤井恒久	下瀬雅允	川波虎太郎	志築岩一郎	細川俊茂	石川吉次郎	緒方三郎	辰野金吾	片山東熊	會禰達藏	佐立七次郎	藤本壽吉	大分
神奈川	佐賀	東京	同	靜岡	愛知	東京	長野	大分	長崎	高知	大坂	熊本	佐賀	廣島	茨城	長崎
渡邊讓	阪本復經	久留正道	小原益知	新家孝正	鳥居菊助	中村達太郎	船越欽哉	瀧大吉	森川範一	吉井茂則	渡邊五郎	近藤貴藏	麻生政包	沖原龍雄	桑原政道	吉原政道
東京	石川	岩手	山口	靜岡	熊本	山口	島根	神奈川	山口	山口	靜岡	同	山形	大坂	三重	石川
松下親業	仙石亮	狐崎富教	山田欽一	近藤陸三郎	牧野相信	藤野聿造	菅田繁	世良梯造	都野豐之進	林賴三郎	石橋政信	永井久太郎	佐藤可通	宮崎可吉	的場中	石田收

一十二 表 名 人 士 學 工

愛媛	福井	長崎	廣嶋	山形	岡山	東京	埼玉	東京	群馬	鹿兒島	岡山	東京	同	東京	愛知	靜岡
田中泰董	高井助太郎	朝永正三	廣田理太郎	鈴木千代吉	渡邊隆	大平松二郎	下山秀久	宇都宮貫一	渥美貞幹	沖一誠	山上正夫	戸谷亥名藏	谷井鋼三郎	用瀬松太郎	岸金三郎	野澤房敬
同	同	東京	茨城	東京	鹿兒島	東京	京都	山口	愛知	同	山口	新潟	石川	東京	長野	佐賀
土井助三郎	市野金三郎	市川俊雄	大久保親誠	中濱西次郎	田中豐輔	阪内虎次	三宅順祐	兒玉隼樾	丹羽正道	林靜介	上野富一	高倉作太郎	伊藤辰吉	白戸隆久	渡邊享	福地文一郎
愛知	東京	福井	長崎	佐賀	鳥取	千葉	長崎	東京	大阪	長野	新潟	山口	岐阜	愛知	兵庫	同
渡邊芳太郎	石田八彌	山田文太郎	大日方一輔	米倉清族	岡嶋好彦	若山由五郎	梅野兵太郎	齋藤賢治	渡邊健雄	山寺容磨	須藤嘉一郎	生田義助	坪井僊太郎	中川五郎吉	細木松之助	森山益夫

表 名 人 士 學 工 十二

岡山	新潟	靜岡	東京	同	長崎	福岡	兵庫	靜岡	東京	京都	山口	長野	和歌山	東京	靜岡	岐阜
山口四郎	笠原鷲太郎	日高偉太郎	間宮伊賀次郎	島田研六	齊藤精一	大坪一助	大原順之助	松田榮一	鈴木錄之助	藤岡作二郎	山縣宗一	春原隈次郎	小杉轍三郎	大嶋六郎	三田守一	神田禮治
岐阜	靜岡	愛知	宮城	愛知	岩手	廣嶋	滋賀	鹿嶋	東京	靜岡	東京	福井	岡山	和歌山	愛媛	廣島
黒田豊太郎	上田敏郎	久野知義	小山友直	小川梅三郎	菅原恒覽	佐分利一嗣	武笠清太郎	野邊七郎	高島米八	栗本廉	小花冬吉	秋山長明	石坂勤一郎	中村武治	黒田正暉	河相保四郎
石川	青森	鹿兒島	同	愛媛	愛知	兵庫	徳島	佐賀	三重	鹿兒島	新潟	東京	新潟	東京	鳥取	鹿兒島
大窪正	工藤謙	吉原重長	村上享一	野口久米馬	中山秀三郎	井上徳次郎	林正枝	山口俊太郎	渡邊秀次郎	長崎豐十郎	南部常次郎	渡邊信四郎	近藤虎五郎	谷村太刀馬	小林柏次郎	鳥越金之助

佐賀 牧野健藏
 愛知 小笠原金吾
 石川 織田又太郎
 合計四人
 總計千〇一人

同	北海道	京都	北海道	長崎	北海道	東京	高知	北海道	〇農學士	合計二百六十七人	秋田	福島	東京	同		
佐瀬辰三郎	足立元太郎	手嶋十郎	中根壽	南鷹二郎	大嶋正健	太田稻造	廣井勇介	佐藤昌介			内田清太郎	秋山義一	堀佛三郎	恩田宮五郎		
合計廿三人					茨城	愛知	熊本	静岡	秋田	岐阜	同	北海道	東京	兵庫		
			山下敬太郎	菊池熊太郎	恩田鐵彌	吉田長治	紫藤章	山口泰次郎	小西文之進	玉井八郎	田中節三郎	小花春吉	野澤俊二郎	渡瀬庄三郎	宮部金吾	小寺甲子二
兵庫	〇農藝化學士		合計十一人		群馬	全	全	東京	全	岡山	廣	京都	東京	青森	山口	〇獸醫學士
吉井豐造					三浦清吉	岡見彦藏	高嶺秀四郎	原八百太郎	生駒藤太郎	佐藤悠次郎	南部太郎	池田音次郎	神戸民之助	廣澤辨二	時重初熊	

明治二十一年十二月十一日印刷
明治二十一年十二月十二日出版

定價金三拾五錢

著者

福岡縣士族

荻原善太郎

東京神田區美土代町
二丁目一番地

發行者

福岡縣士族

岡保三郎

東京神田區美土代町
二丁目壹番地

印刷者

靜岡縣平民

西原喜一

東京京橋區日吉町
拾四番地

發兌書肆

吉岡書籍店

東京神田區南乘物町



281.

0313m

Ⓜ

国立国会図書館

004883-000-4

281-0313n

日本博士全伝

荻原 善太郎 / 著

M21

ACE-1606



